群馬県神流川流域の遺跡

酒詰仲男

目次

はしがき　六五～六六頁
1　巡検日程　六六～六七頁
2　本地域の概観及研究史　六七～六九頁
3　遺跡及遺物概観　六九～一二六頁
A　石器時代遺跡　六九～一二三頁
I　遺跡各説　六九～一二三頁
一　真下遺跡　七〇頁
二　譲原遺跡　七〇～八〇頁
a　遺跡
b　石器
c　土器
d　土製品
考按
三　下阿久原遺跡　八〇頁

a 遺跡
b 遺物
四 今里遺跡 八〇～八一頁
五 保美濃山遺跡 八一～八五頁
a 遺跡
b 遺物
附記
六 坂原遺跡 八五～八九頁
a 遺跡
b 遺物
七 古指遺跡 八九頁
八 堂平遺跡 八九頁
九 法久遺跡 九〇頁
a 遺跡
b 遺物
一〇 太田部遺跡 九一頁
a 遺跡
b 遺物
一一 相見遺跡 九一頁
一二 万場町ヌゴウ（或はノゴウ）遺跡。附、山ノ神遺跡 九一～九五頁

a 遺跡　九五頁～九七頁
b 遺物
附記
一三 神ケ原遺跡
a 遺跡　九七頁～九八頁
b 遺物　九八頁
一四 三津川遺跡　九八頁
一五 相原遺跡
一六 野栗遺跡　九八頁
一七 新羽遺跡　九八～一〇七頁
はしがき
a 遺跡　一〇七頁
b 遺物　一〇七頁～一〇八頁
附記　一〇八頁
一八 川和遺跡　一〇九頁
一九 川和諏訪神社背後遺跡　一一二～一二三頁
二〇 乙父遺跡
二一 稲原遺跡
二二 十石峠東側中腹遺跡
I 文化概観

群馬県神流川流域の遺跡

一　遺跡について　一一二～一一五頁
二　遺物について　一一五～一一九頁
人骨
自然遺物について
人工遺物について
三　概観及考按　一一九～一二三頁
B　石器時代以外の諸遺跡　一二三～一二五頁
一　鬼石町バス車庫裏の古墳
二　鬼石町三杉町原古墳
三　鬼石町三杉町太樫（俗称）古墳
四　美原村譲原字真下古墳
五　美原村坂原上製鉄遺跡？
六　埼玉県（武蔵国）秩父郡上吉田村大字太田部字梁場（俗称塚山）古墳
七　向尾遺跡
八　檜峠古墳
九　檜峠土城
一〇　生犬穴洞窟
一一　上野村大字乙母字諸城古墳
一二　同村大字乙母字峠古墳
C　飯島、桜沢両氏による神流川流域内外の石器時代遺跡地名表　一二五～一二六頁

余　録　一二七～一三一頁

a　アユに関するもの
b　ヤマベ、カジカに関するもの
c　主食について
d　果　実
e　動　物
f　十石犬
g　山中美人
h　方　言
i　農　具
j　生　業
k　住　居
l　伝　説

図版目次

第一図　利根上流地帯一般図
第二図　神流川流域遺跡分布略図（巻末）
第三図　譲原遺跡附近略測図　平面
第四図　第三図A－B、C－D断面図
第五図　譲原遺跡出土遺物1　石器

第六図　譲原遺跡出土遺物2　石器
第七図　同　上　3　石鏃及土器片
第八図　同　上　4　土偶その他
第九図　美原村今里遺跡略測図
第十図　保美濃山天理教分教会附近遺跡
第十一図　保美濃山出土遺物1　石器類
第十二図　同　上　2　土器片
第十三図　同　上　3　同　上
第十四図　美原村坂原遺跡略測図
第十五図　坂原遺跡平面及断面図
第十六図　坂原遺跡出土土器片
第十七図　美原村坂原字法久峯遺跡略図
第十八図　万場町ぬごう遺跡略測図
第十九図　万場町八幡神社所蔵石棒
第二十図　中里村神ケ原遺跡略測図
第二十一図　神ケ原遺跡出土石器等
第二十二図　万場町相原遺跡略測図
第二十三図　新羽遺跡略測図
第二十四図　新羽遺跡出土遺物1　石器
第二十五図　同　上　2　石器

第二十六図　新羽遺跡出土遺物3　石鏃
第二十七図　同　上　4　土器片
第二十八図　樋原遺跡略測図
第二十九図　三杉町原西北古墳略測図
第三十図　火之雨塚見取図

附表目次

第1表　神流川流域遺跡総表　一〇九～一一二頁
第2表　同　上　高距表　一一三頁
第3表　同　上　面積比較図　一一四頁
第4表　神流川流域出土遺物概表　一一五頁
第5表　各遺跡編年表　一一九頁
第6表　神流川流域各期遺物目録表　一二一頁

はしがき

昭和二二年春以来群馬県多野郡美原村中学校の桜沢重利氏より屢々来信あり、同地方の遺跡に就て紹介された。この地域は信州南佐久地方と関東地方とを結ぶ重要な連絡路である十石峠路の走るところで、関東平地と山岳地方との文化の交渉を知るためには是非一度は調査すべき地帯である。偶同年夏同氏等がこの流域一帯の遺跡を調査する計劃ある旨を聞知し、人類学教室の暑中休暇を利用し、この行に参加することとした。本調査についてお世話になつた美原村々長榊原鷹司氏、同村中学校長飯島勘一氏、中里村々長今井総平氏、万場中学校長、上野村々長塚田武雄氏、上野村東中、小

学校長及教職員諸氏、上野村西小学校長橋爪松治氏、調査の手伝いをお願いした鎌倉中学校生藪野豊明、宇野小四郎の諸氏に深甚なる謝意を表する（以上役柄は全部当時のもの）

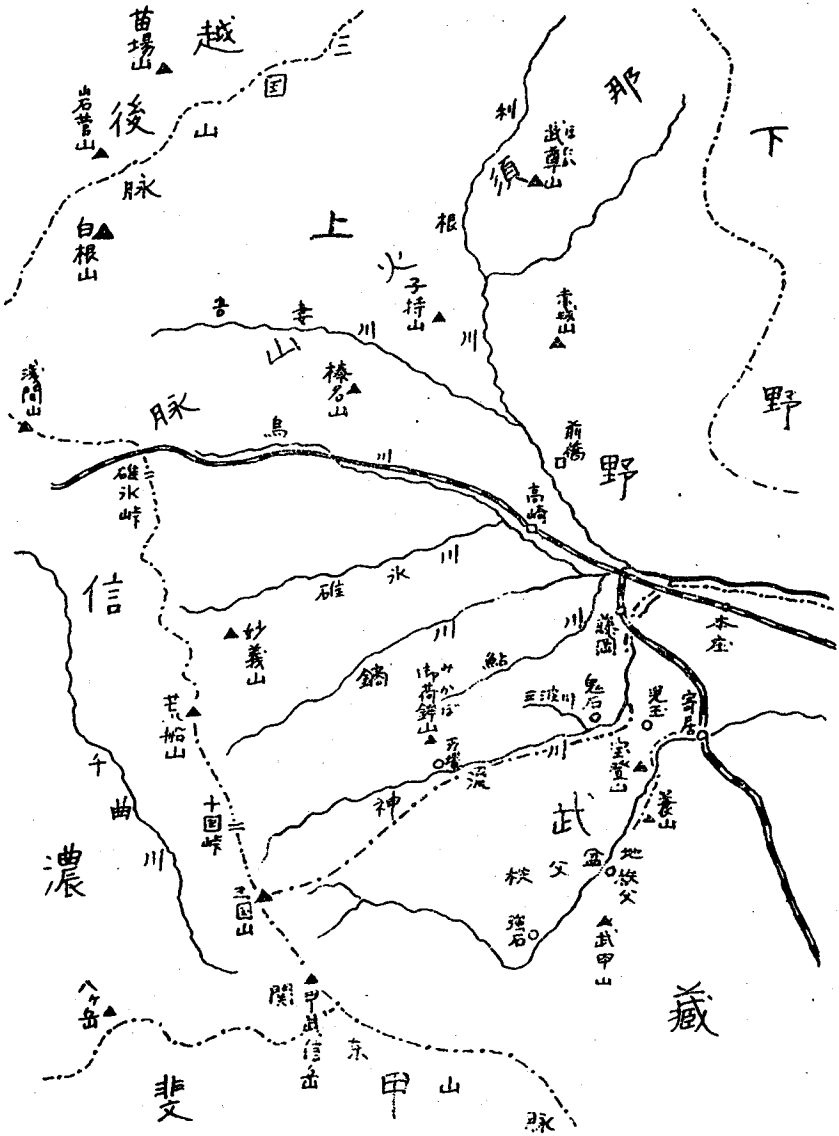
1 巡検日程

昭和二二年七月三一日午前八時三〇分上野発新潟行にて出発、鎌倉中学の藪野、宇野両君と同行。途中深谷を本圧と間違え下車、バスにて本圧に赴き、そこから一三時発のバスで鬼石に達し、同地から徒歩で、一六時近く美原村中学校に着、桜沢氏と連絡とれず、夜に到り漸く飯島校長と会い、同夜は同校に第一夜の夢を結んだ。本日途中秩父片麻岩の露頭の上を歩み、神流川の風光明眉なるに驚嘆した。第二日。八月一日。早朝美原村中学校附近発掘の遺物を見、飯島校長の案内で、八時三〇分出発、先ず坂原遺跡を実査、役場に赴き村長に挨拶、そこで初めて桜沢氏に会見。午後は保美濃山遺跡を実査、夜は飯島校長宅に厄介になる。第三日。八月二日。早朝学校へ戻り、七時三〇分のバスにて譲原に赴き、同地分教場の教職員諸氏に迎えられ、午前中及午後に亘つて同校内遺跡発見の遺物を見、遺跡を実査し、同処附近の真下及堀之内に亘る包含地及古墳を採訪、一七時のバスにて万場にのぼり、同夜は同地小学校宿直室に宿泊。同行者は飯島校長、桜沢氏、藪野、宇野両君及予の五名である。第四日。八月三日。早朝全員にて同校上ヌゴウ遺跡、山ノ神を見、新羽行のバスに乗車、橋爪松治氏の息と同車したのは奇縁であつた。予等は途中神ケ原にて下車、同地の遺跡を実査、役場にて昼食昼寝後、川向いの三津川遺跡を実査、最終バスにて新羽終点迄のぼり、一八時過ぎ上野村東校に着。同夜は偶々同校に教育映画の催しがあつた。第五日。八月四日。早朝野栗沢遺跡の探査に赴いたが、明瞭でなかつた。引き続き塚田村長を訪問、同氏の案内で今井平遺跡を実査、午後村長所有の稗畑の一部を発掘することにして一旦帰校、午後同校教職員諸氏の協力を得て発掘を実施し、終了後瀬にて土器を洗い、重ねて同校泊。第六日。八月五日。午前中予一人にて今井平遺跡の歩測。その間に藪野、宇野両君、昨日発掘した遺物の整理。一一時から約一時間今井平

遺跡に関して、教職員諸氏に話す。昼食後土器を分類して、一四時三〇分出発、桜沢氏は発熱して同校に残留と決した。先ず城山の土城を見、乙父遺跡を実査、貫前神社の石棒を見、夕立を小春の一民家に避け、夕刻漸く最終目的地たる上野村西校着。直ちに旧知橋爪小学校長の宿舎に赴き、夕食の馳走になる。同夜は幻燈会の為橋爪氏は十石峠麓の白井まで出かけ夜半帰宅。第七日。八月六日。早朝先ず炬火の用意をする。西校々庭内外の遺跡を実見した後、小春の飯島氏知人宅に赴き荷物を置き、同宅の息藤岡中学校生の案内で生犬穴石灰洞を実査、梯子がこわれていた為奥迄行くことは出来なかつた。途中自転車で帰郷する橋爪校長と暫らく行を共にし、一一時近く東校へ帰来。それから僅かの時間に残りの土器の分類を完了し、藪野、宇野両君は残留して、遺物の拓本をつくることにする。他は、一五時のバスで万場迄くだり、同処で鬼石行のバスに乗り継ぎ、途中太田部にて下車、太田部遺跡を実査、一九時近く美原村中学校へ帰来。夕方から雨劇しくなり、蠟燭を囲んで皆にて雑談。第八日。八月七日。予は坂原及保美濃山遺跡出土品を一覧した後、九時のバスにて出発、同じバスで藪野、宇野両君もさがつて来た。同君等はここにて下車、一日美原中学校の遺物の拓本をとることになつていたからである。飯島校長と予は譲原に赴き、美原村中、小学校職員諸氏に入門的な話をする。一六時のバスにて藪野、宇野両君も来着、譲原分教場の遺物の拓彫等をとり、同夜は万福寺の息が中学校先生である関係で、分教場附近の同寺の厄介になる。第九日。八月八日。午前八時頃から分教場に赴き、昨日の仕事の残りをし、一〇時のバスにて出発、鬼石にて、鬼石町入口の三杉町原の古墳を見、飯島校長、桜沢氏、万福寺息河野氏等に見送られて一二時のバスにて本庄町に向つて出発、これにて本地域の実査を終了した（第二図、折込み参照）

2　本地域の概観及研究史

神流川は利根川右岸の一支流であつて、同川右岸の大支流としては最下位にあるものである。この上に鏑川、碓氷川、吾妻川等が関東山脈及三国山脈を源として、利根本流に注いでいる。神流川の源は三国山で、信州側では千曲川右岸の



第 1 図　利根上流地帯一般図

一支が同じこの山から発している。神流川は上野と武蔵の境をなす川で、その右岸から山一つ越えると、同じ山を源として発する荒川の本流が流れる秩父盆地である。万場迄は大体神流川が正しく上野と武蔵、群馬県と埼玉県の境をなしているが、それより上流では上野の方が、その右岸へ大分喰い込んでいる。神流川は鬼石附近から山地に入るのであるが、その附近迄は古墳地帯である。殊に児玉町附近は和銅開宝の銅の産地としても有名な地帯である。又鬼石町の西端では三波川が神流川と合流しているが、この三波川筋や、その西側の御荷鉾山は地質学上有名なところである。上野村方面の山中地溝帯も知る人が多く、この方面は一体に山が低い。この地溝帯に達する迄の神流川筋に於ては、到るところに秩父片麻岩の露頭が見られる。地溝帯に入ると、秩父古生層の隆起は著しく弱まる。この流域の専門家による考古学的調査は、従来殆んど行われたことがない。唯、南作久方面から八幡一郎氏の調査の触手が、十石峠を僅に越えてのびているのみである。とは言つても、今回予等が実査した遺跡の大部分は、飯島勘一氏が永年に亘つて探査し、実査したもので、われわれが今回新らしく発見し得たものは一つも無い。われわれのなし得たことは、各遺跡の土器の編年を行い、遺跡ごとに、その地形的考察を遂げ、この地域で出会つた多くの人びとに新遺跡発見の為の示唆を与え得たと言うこと位のものであつた。今回の予等の調査を機会に、飯島校長を中心に、この方面に関心を持たれる諸氏が結合して、一つの調査機関が持たれるような状勢になつたことは同慶の到りである。最初にも述べたごとく、この地域は関東地方と山地との連絡路であつて、一つの文化の交換路、流路をなしていた筈の場所であり、かかる観点からの考察が、強く押し進められねばならぬこと勿論であり、それがこの地域の研究に一つの特殊性を与えるものとも言わねばならぬ。

以下予は先ず各遺跡の各論を進めることとする。

3　遺跡及遺物概観

A　石器時代遺跡（第一図参照）

I　遺跡各説

一　真下遺跡（第二図参照）

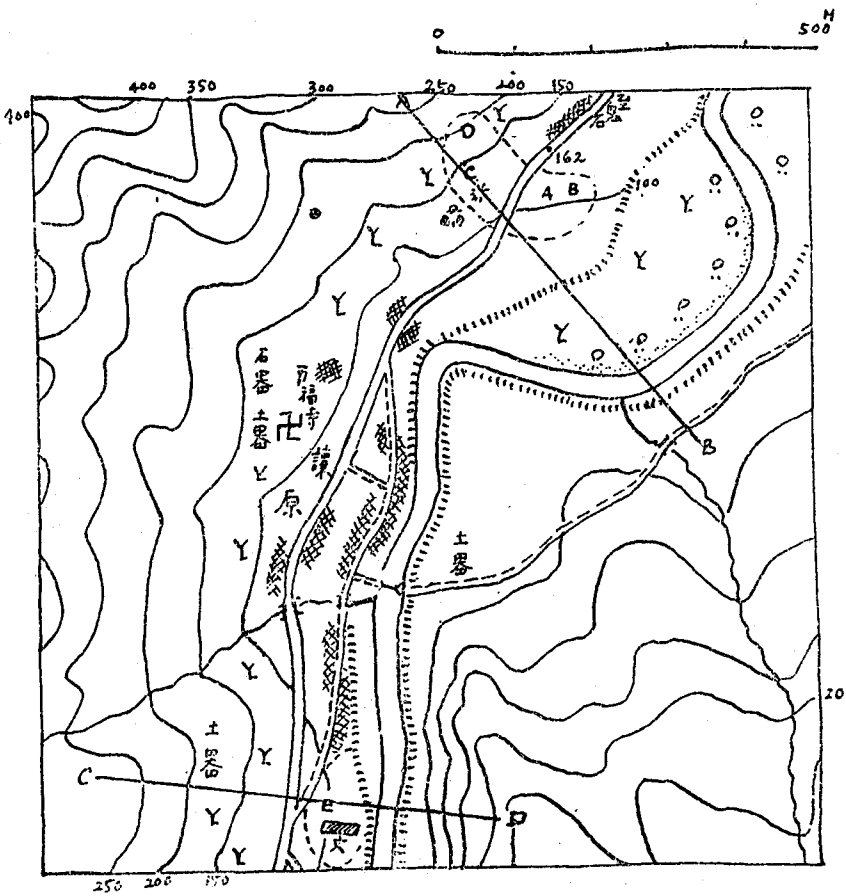
鬼石町三波川と神流川本流との合流地点の上一・三粁のところにあつて、沿道に沿うている。遺跡の大部分は西北側の平地（たいら）にあるが、一部は県道と川の間の一段低い畑にも亘つている。行政区劃から言うと、美原村大字真下及堀之内の両地域に亘つている。字で言うと相舞、今里、橋下、屋敷及桑原に及んでいる。遺跡全体殆んど平旦で、土器の分布は東西二〇〇米、南北五〇米に亘つており、標高は約一七〇米である。第二段目の河成段丘が大体一〇〇米の等高線で示されており、本遺跡はその上に載つているものと見られる。実査したところに依ると遺物はすくない。この遺跡の一部に真下の古墳（第三〇図C）がある。採集した少量の遺物から見ると、土器の主体をなすものは後期の堀之内式である。A地点から土偶が発見されたことがあり、B地点には住居阯らしきものがあつたと言われる。その附近には殊に石鏃とその原石である黒曜石の破片が多く発見されたと言うことである。

二　譲原遺跡

a　遺跡

この領域で最も有名な遺跡である。昭和一一年分教場を設けるに当り、運動場を削平したため、遺跡であることが解り、井戸を掘るに及んで炉阯が発見された。この事実は発掘の当事者たる飯島勘一氏によつて報告もされ、その後、金鑽神社宮司萩原正三、岩沢正作、松平義人、丸山清康、山崎義男の諸氏が来査したと言うことである。現在ではその炉阯が小屋掛で保存されており、その当時採集された遺物は、一部亡失したものもあるらしいが、大部分は同教場に保存されている。本遺跡は鬼石町の西南三・〇粁、真下遺跡の上流〇・七粁の地点にある。土器の散布している範囲は東西五〇〇米、南北一〇〇米である。この遺跡の北側の限界は、神流川本流に注ぐ小渓流で、南は運動場の端まで、西は街道迄、東は校庭下の畑迄である。これの範囲内には特に土器片の多く散布している地点があり、その一つは現在の校舎の附近にある。この遺跡の標高は中心で一〇〇米であるが、これは真下遺跡の最低部と略一致している。この遺跡も第二段目の河成段丘から、一部第一段目のものにかけて存する。敷石住居阯と言うのは飯島勘一氏の主張で

第 3 図　譲原遺跡附近略測図　平面（桜沢原図）



A　土偶出土

B　住居趾らしきもの
　　附近に石鏃及黒曜石散見

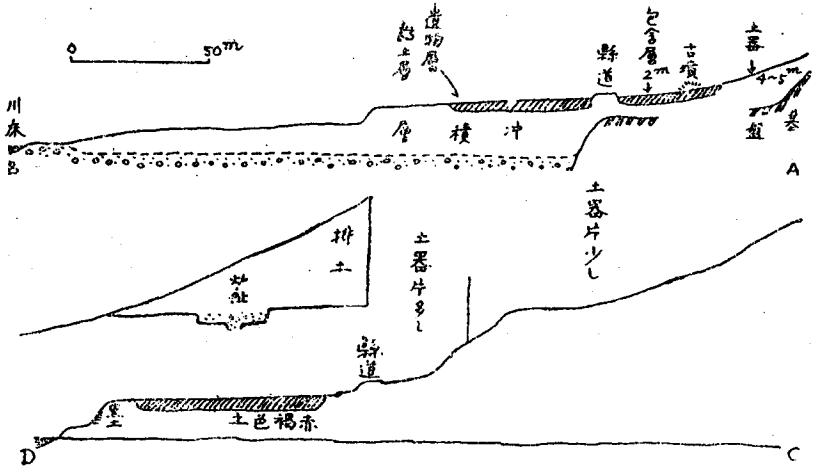
C　古墳

D　土器破片

E　炉趾

∴　永福寺趾
　　鎌倉時代寺院　室町時代に戦災滅

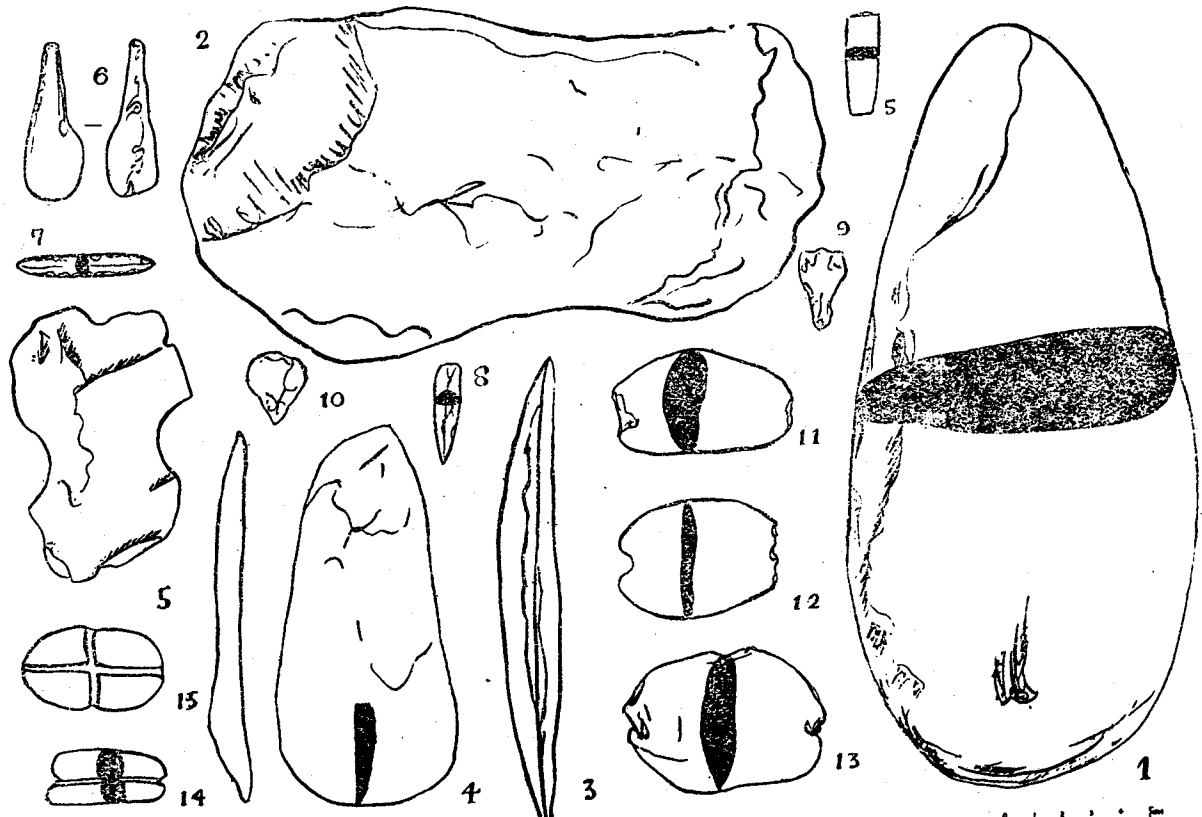
⁂　土器散布



第 4 図　第3図 A—B / C—D 断面図（桜沢重利原図）

あるが、予は単なる炉阯と考え度い。発掘以来一〇年近い時を経過したことであり、種々な人が破壊した後であるから、多少譲歩するとしても、粘土を敷いた地表住居阯で、敷石住居阯ではない。何となれば炉の周辺にあるのは大体角張つた自然石で、この附近に無限に産する片麻岩等の平石が使用されていないからである。本来この凸凹した石の間に、それが平になる程に厚く粘土が敷かれてあつたものと言うが、それなればそれは益々地表住居阯で、敷石住居阯ではない。その粘土敷の範囲は、別に方形とか、円形とかを呈していたものでもないらしい。炉は四方を結晶片麻岩で囲み、その中に厚さ約三〇糎の灰層があり、灰の中からは少量の木炭片が出土したと言う。炉を囲む石は粘土敷よりすこしく高く、且つ平面的に見て、それの略中央に位置していた。敷の外周には土器片殊に多く、炉に接して石錘が発見されただけで、そのほか別に特記すべき発見物はなかつた。土器は悉く堀之内式である。柱穴は一つも発見されていない。この点住居阯とすることさえ躊躇されるのであるが、柱は石の間に樹てたものとも考えられる。この外石器と土偶等がある。実見したものについて略記すれば以下の如くである。

b　石器



第5図　譲原遺跡出土遺物1　石器

群馬県神流川流域の遺跡

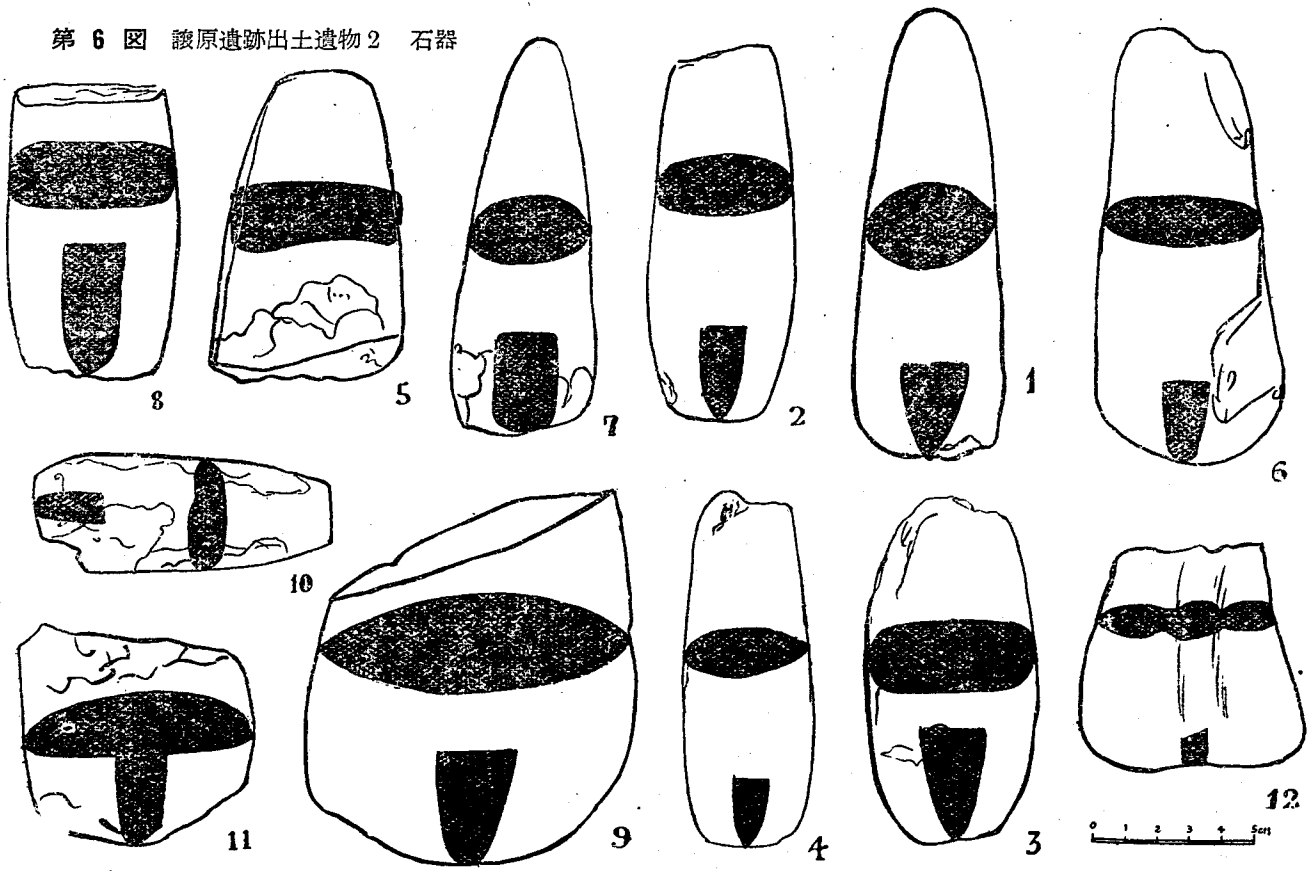
(イ) 巨大なる石器（第五図1及2）　一、一個は長さ二二・五糎、最大幅一二・五糎、中央の部分が幾分くびれている。打製石斧に準ずべきもので、一端が欠損している。二、長さ二七・〇糎、最大幅一二・五糎、厚さ三・五糎、足形の自然石で、一側面が全部欠裂されている。これは槌石と考うべきものである。なおこれ等の所かにも数個の同じ資料がある。

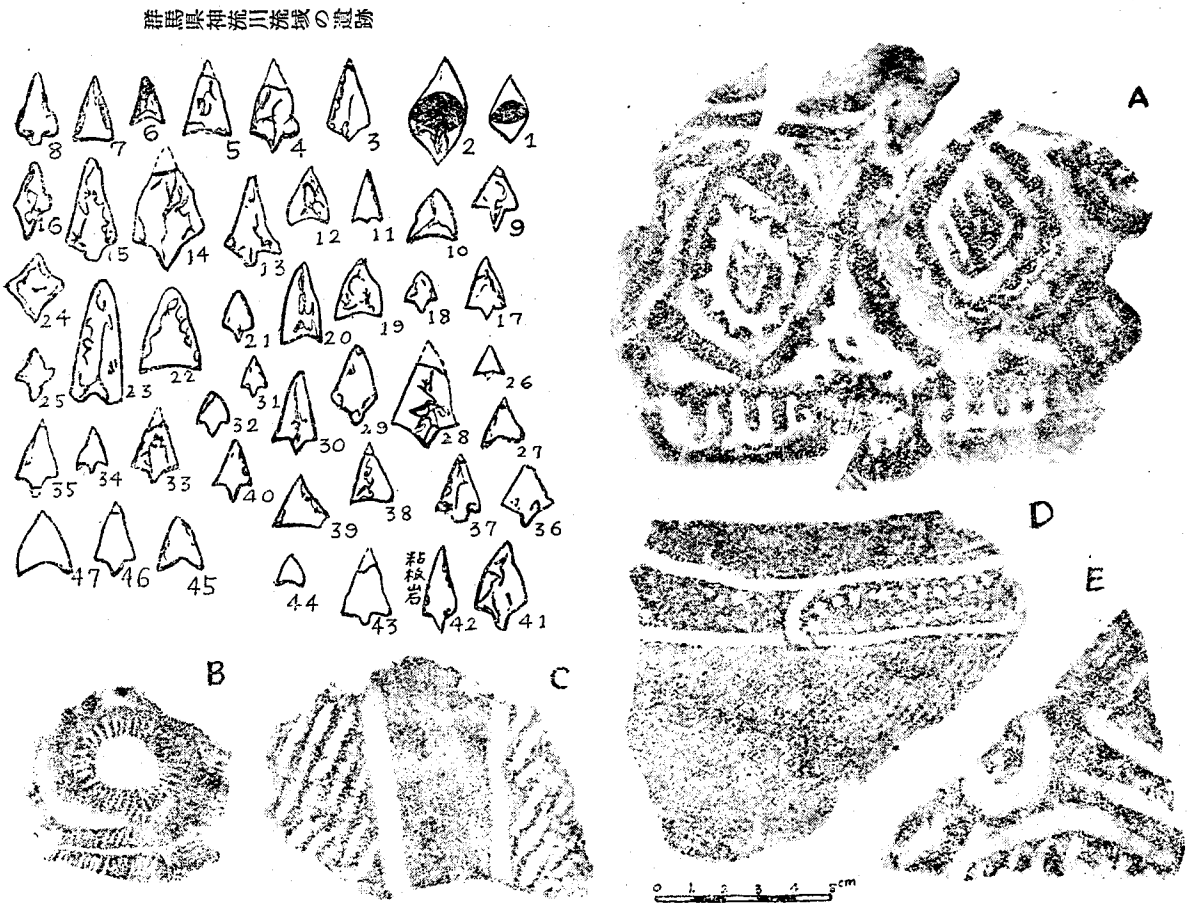
(ロ) 打製石斧（第五図3、4、5）　これも一斑をあげることとする。一、長さ一六・五糎、最大径八・〇糎。自然石を打ち欠いて大体の形をつくり、それに再修整を加えたものである。全体の型は刃の方が幾分ひろがつた七型である。二、全長一三・五糎、最大幅六・五糎、厚さ〇・七糎、全部の形及製作は前者と同一である。石材は緑泥片岩である。三、相当にくびれの強い分銅形である。長さ九・五糎、最大幅六・五糎、粘板岩製である。

(ハ) 磨製石斧（第六図1、2、3、4、5、8及第五図5）　一、長さ一四・〇糎、最大幅四・五糎、厚さ二・七糎、断面は楕円形で、定角式ではない。二、現長一一・五糎、最大幅四・三糎、厚さ二・〇糎、断面楕円形のもの。住居趾附近の出土品である。三、長さ一一・〇糎、最大幅五・五糎、厚さ二・三糎、全体の形が楕円形で、断面の形は稍定角式に近い。四、長さ一一・二糎、幅四・〇糎、厚さ一・二糎、両側及刃の部が尖つている。五、現長六・〇糎、最大幅六・〇糎、厚さ二・二糎、刃部が欠損している。定角式である。六、現長九・五糎、幅五・五糎、厚さ二・二糎、茎部欠失。七、小型の定角式のもの。長さ三・六糎、幅一・一糎、厚さ〇・六糎。

(ニ) 石鏃（第七図1—47）石鏃は頗る多い。図示しただけでも四七個あり、その大部分が黒曜石製で、片麻岩、硅岩或は粘板岩製等のものが少数認められる。無柄のもの一四個で、他はすべて有柄又はそれに準ずべきものである。有柄のものについては、その茎が一方に偏して附着し、且つその尖端が扁向しているものが多い。渡辺仁氏の教示によれば、かかる癖のあるものは殊に盤城方面に多い由である。又柄が体部に深くくい込むことなく、略水平位に附柄されているものの多いことは、関東式であつて、信州式ではない。

第 6 図　譲原遺跡出土遺物 2　石器





第7図　該原遺跡出土遺物3　石鏃及土器片

(ホ) 石錐（第五図6、7、8、9、10）一、長さ五・八糎、幅二・一糎、粘板岩製で、鶴嘴状のものである。住居阯附近出土。二、長さ五・〇糎、幅〇・八糎、黒曜石製で、柱状のものである。三、長さ三・七糎、幅〇・五糎、黒曜石製で柱状のものである。四、現長三・〇糎、幅一・八糎、黒曜石製で鶴嘴状、尖端部が欠失している。五、長さ二・七糎、幅二・二糎。黒曜石製で、全体の形はハート型に近いものである。

(ヘ) 石匕（第八図54）横型のもの。長さ三・〇糎、幅五・三糎、黒曜石製、住居阯附近の出土品である。

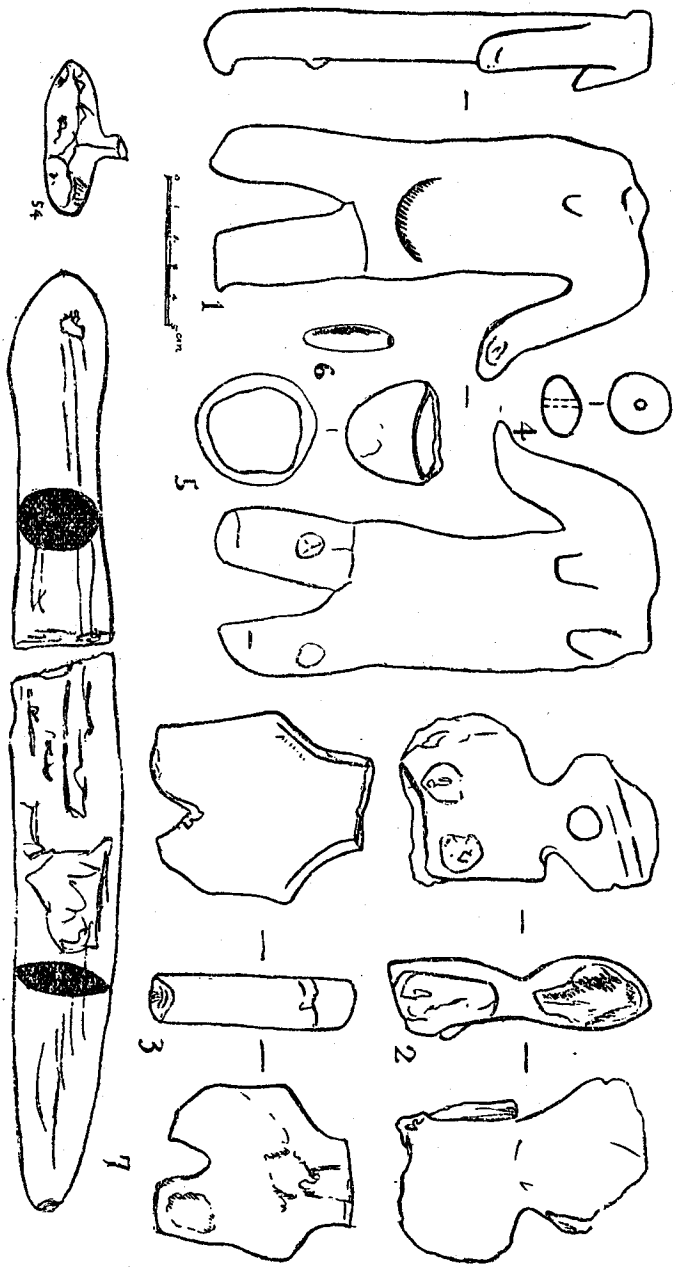
(ト) 槌石（第六図6、7、9、10、11）一、磨製石斧形、長さ一三・五糎、幅六・〇糎、厚さ一・八糎、刃さえあれば磨製石斧とすべきものである。二、長さ一二・〇糎、幅四・五糎、厚さ二・三糎、断面楕円形、住居阯附近出土。三、現長一一・五糎、幅一一・三糎、厚さ三・三糎、両端に稜があり、茎の方が截然と欠けている。四、長さ九・三糎、幅三・七糎、厚さ一・二糎、礫岩製、住居阯附近出土。五、現長六・四糎、幅七・三糎、厚さ一・三糎、片岩製のもので、長さが半欠している。磨製石斧に比して、これ等が非常に多いのは問題である。未完成品か、逆に使いふるしか、いずれかであろう。これ等のほかに砂岩製のもの一五個、所謂石鹸石に類するもの等が数箇ずつある。

(チ) 石劒（第八図7）一、緑泥片岩製で二分し、中央部が欠失している。一端は肥厚し、他端は尖つている。肥厚している方は厚さ二・一糎、幅三・〇糎の楕円形、尖つている方は、幅三・四糎で、稜がある。緑泥片岩製で住居阯附近の出土品である。二、他に長さ二七・〇糎、幅四・二糎、片麻岩製のものがある。

(リ) 石錘（第五図11、12、13、14、15）一、自然石の長軸の両端を欠けるもの。長さ七・三糎、幅三・八糎、厚さ二・〇糎。二、同上のもの、長さ凡そ五・五糎、幅四・二糎、厚さ〇・六糎。三、同上のもの、長さ凡そ七・〇糎、幅五・〇糎、厚さ〇・七糎。四、長軸の両端に糸かけがあり、且つこの両端をつなぐ溝がある。長さ約四・三糎、幅二・〇糎、厚さ一・〇糎、住居阯附近出土。五、四方に欠点があり、且つこれをつなぐ十字形の溝がある。長さ五・〇糎、幅三・〇糎。

(ヌ) 石砥（第六図12）長さ七・〇糎、幅七・〇糎、梯型。砂岩、中央に二本削磨痕がある。

(ル) 石皿　緑泥片岩製のものの破片が数個ある。



第8図　諏原遺跡出土遺物4　土偶その他

c　土器

(イ)　古式加曾利E式（第七図E）赤焼の深鉢型で、底の平たい、比較的小形のものの破片と思われる。線文を主とし、縄文のすくない古いものと、磨消縄文の厚手のものとがある。後者には器形の大なるものがあると思われる。

(ロ)　堀之内式土器浅鉢で文様の細かいものと、深鉢で文様の粗大なるものとがある。住居阯附近からは堀之内式が純粋に出土したものの如くである。その他の部位にあつても、大部分はこの式である。

(ハ)　加曾利B式（第七図D）少量文様の細かい加曾利B式が混入している。

(ニ)　勝坂式（第七図A・B）追加資料。地点を幾分異にして出土したと言う。

d　土製品

(イ)　土偶（第八図1、2及3）一、現高一五・〇糎、首部欠失、赤色、手足の尖端は簡単である。両乳があり女性である。背部と腰の辺が凹んでいる。両方の膝の上に附点がある。この土偶は加曾利B式に伴出するものであろう。二、現長約八・三糎、山形のものである。胸部以上が現存し、以下は欠失している。顔面は横に平行線があり、中央に一つの凹点がある。乳房があるから、これも女性である。これは勿論加曾利B式に随伴するものであろう。三、現長七・〇糎、腹部より膝部までの破片、腰部が角張つてひろがつている点は所謂木兎形のものに類似しているが、或は所謂山形土偶の破片かも知れない。

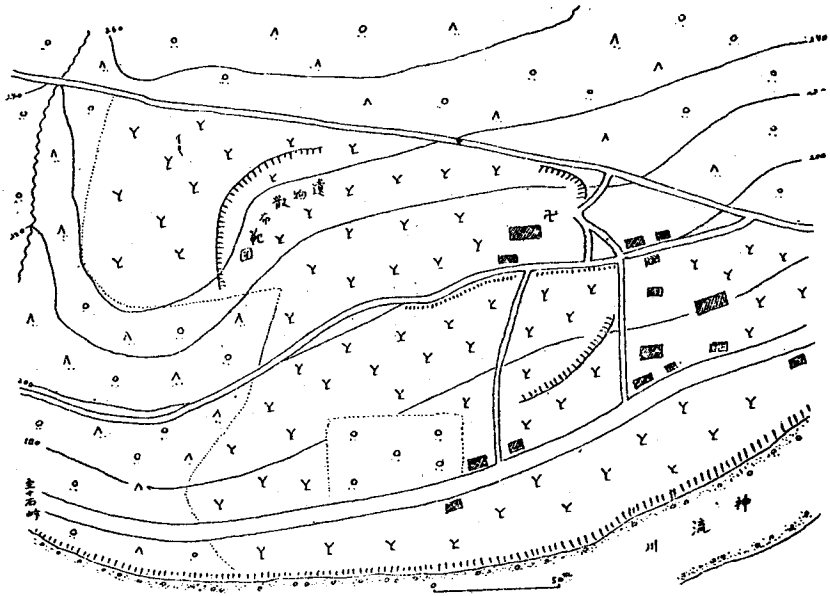
(ロ)　土玉（第八図4）径二・一糎、厚さ一・四糎、中央よりすこしく偏して穿孔されている。

(ハ)　土錘（第八図6）長さ三・三糎、管状のもの。

(ニ)　袖珍土器（第八図5）径三・八糎、深さ三・二糎。

考按

本遺跡は神流川の第二段目の河成段丘にある中期初より後期に亘る遺跡で、堀之内式の頃に殊に盛んであつた聚落と



第 9 図　美原村今里遺跡略測図（桜沢重利原図）

考えられる。石器は多く、土器片も多い。然し土器及石器について見るに、尙関東地方の他の遺跡のものと特に異つた点はない。石器の原料は大体附近に産するものが多く、黒曜石のみが他の地域から移入されたものと考えられる。

参考文献

1、飯島勘一「上野国多野郡美原村譲原石器時代遺跡発掘略報」毛野、昭一一。

2、桜沢重利「上野国多野郡美原村譲原遺跡」（プリント）昭二二、四。

三、下阿久原（しもあくはら）遺跡

a　遺跡

真下遺跡の対岸にあつて第一の段丘にのつている点が異つている。非常に広大な遺跡と思われるが精査はしなかつた。埼玉県（武蔵国）若泉村大字上阿久原字前淵に属する。

b　遺物

土器は主として堀之内式である。

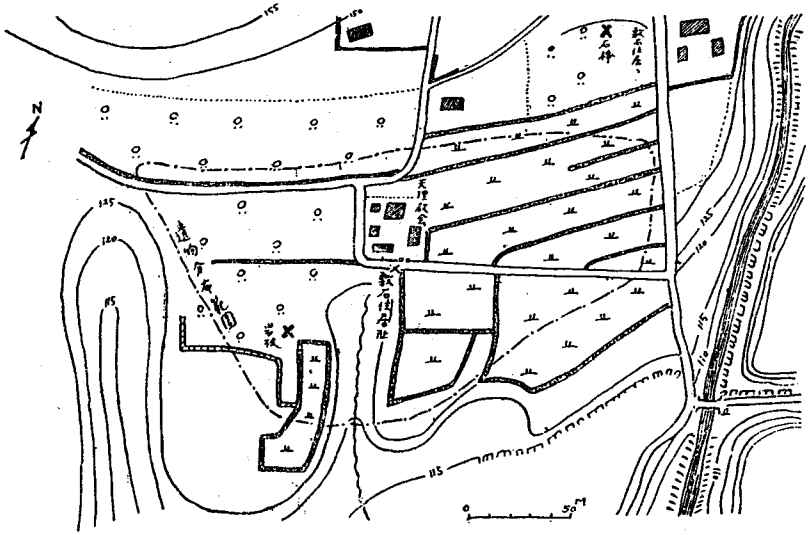
四、今里遺跡

譲原の上三・五粁の地点にある。新道は瀬に沿うて走つているが、旧道は山麓に這いあがつて、それを横断する。それが再び下つて新道と合うのであるが、この脇道の中央の辺、道の下に梨棚のある辺が遺跡である。黒曜石が散布しており、石鏃も嘗て採集された。土器は諸磯式と加曾利E式とである。この遺跡は昭和二三年八月、二回目に探訪したものである。

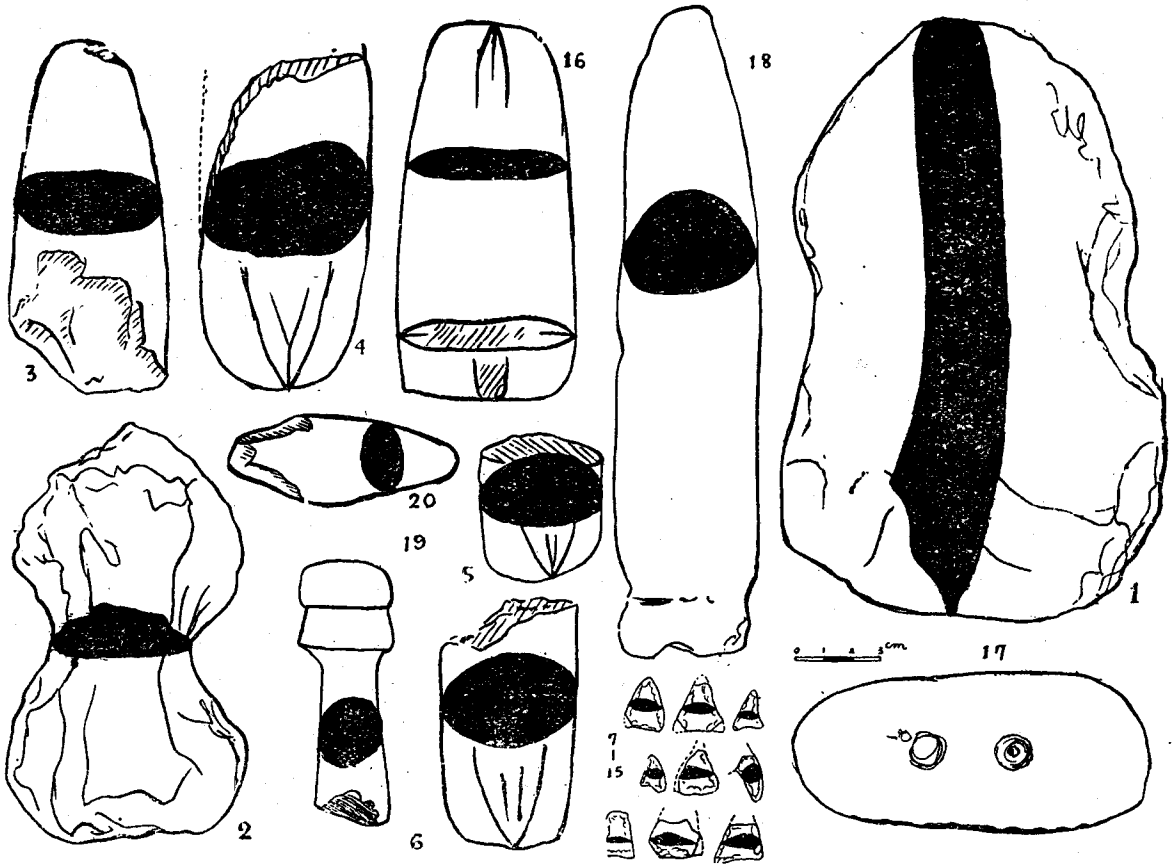
五　保美濃山遺跡

a　遺跡

譲原の上流八・〇粁の上流にある。飯島勘一氏が発見し、屢々採集し、その遺物は公会堂、美原中学に保管されている。美原村の役場の辺から、山の方へ細流に沿うてのぼつたところにある。詳しく言うと、この道に沿うて公会堂の前を過ぎ、橋を渡つたところで左折すると天理教会の前に出る。遺跡はこの教会を中心に東西約二〇〇米、南北約一五〇米に亘つて存する。この遺跡の直下が大体第一の河成段丘で、この遺跡は真下、譲原と同様、第二の段丘に載つているものと見られる。遺跡の大部は桑畑であるが、最近それを掘り下げて水田にした部分もある。土器の散布する多さは中位である。天理教会の前で、敷石住居阯が発見されたが、その一部は街道路



第 10 図　保美濃山天理教分教会附近遺跡　酒詰歩測原図



第11図　保美濃山出土遺物1　石器類

下に埋没されている。発掘された部分は石がおこされた為全形を知ることは困難である。断面に灰と炭のある箇処も見られる。本遺跡は中央の谷を距て、東方前野と、西方犬目の二字に跨つており、俗に江下平(えげだいら)とも呼ばれている。

b　遺物

I　石器

(イ)　巨大なる石器（第一一図1）一、長さ二一・〇糎、幅一五・三糎、厚さ三・五糎、砂岩。刃部及両側に打裂がある。打製石斧とも称すべきものである。二、長さ三一・五糎、幅中央にて一六・〇糎、厚さ四・五糎。全体は一方の広い楕円形である。

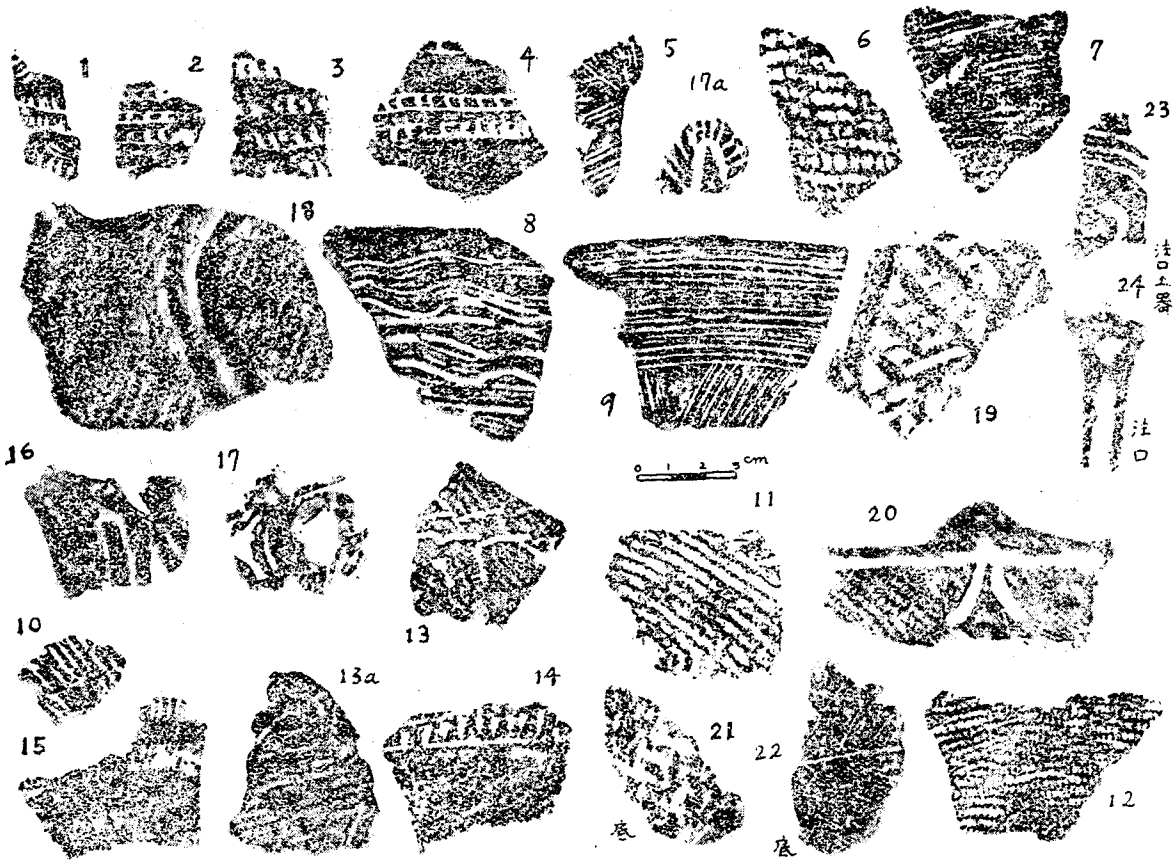
(ロ)　打製石斧（第一一図2）分銅形のもの。長さ一四・五糎、厚さ二・〇糎、緑泥片岩製。

(ハ)　磨製石斧（第一一図3～6）一、現長一三・五糎、最大幅一四・七糎、厚さ三・五糎、断面は蛤形とも言うべき厚いものである。刃部を欠いているが、若しかすると譲原に見られた槌石の一類品かも知れない。緑泥片岩製。二、予が表面採集せるもの。原長不明。緑泥片岩製の半欠品。3～6いずれも半欠品。

(二)　石鏃（第一一図7～15）大部分黒曜石製で、予が見たところでは無柄のもののみである。唯譲原遺跡に見られるような非相称はここにも見られるごとくである。しかし大部分は関東式のものである。全体の数量は非常に多いと思われる。

(ホ)　槌石（第一一図16、17）　一、現長一〇・〇糎、幅五・五糎、厚さ四・〇糎。断面は楕円形である。譲原に見られた例の磨製石斧形のものである。　二、長さ一二・五糎、幅五・五糎、中央二箇処指かけの凹みがあり、且つ一側面に押痕が見られる。

(ヘ)　石棒（第一一図18、19）　一、現長二二・〇糎、径四・七糎、断面は半円形に近い。一端にくびれがあり、その先が膨隆していたものと思われるが欠失している。二、膨隆した尖端部のみの破片、輝岩製。現長九・五糎、断面は



第12図　保美濃山遺跡出土遺物2　土器片

円形で、その径は二・三糎である。

(ト) 礫器（第一一図20）自然石の一端が打ちかけているもの、槌石の破片かも知れない。

(チ) 発火石　所謂蜂窩石の破片が四個ある。これ等は互に継ぐことの出来ないもので、各破片悉く、別々のものと認められる。

Ⅱ　土器

(イ)、諸磯式（第一二図1～12）諸磯A式及B式の破片一〇個余りと、諸磯C式の破片数個とあるが多くはない。(ロ)、五領ヶ台式（第一二図13～15）この種のものの破片は余り多くない。(ハ)、勝坂式（第一二図16、17、17a）この類のものもすくない。(ニ)、古式加曾利E式（第一二図18、19、20）破片数個。(ホ)、堀之内式（第一二図21底部、23、24注口部破片、第一三図25～32）浅鉢形の文様の細かいもの、深鉢の文様の粗雑なるもの、注口土器の破片と思われるもの等がある。第一三図26は深鉢の把手と思われるもので、同28も把手付である。(ヘ)、加曾利B式（第一三図33、34）大きな厚い土器片であるが加曾利B式である。

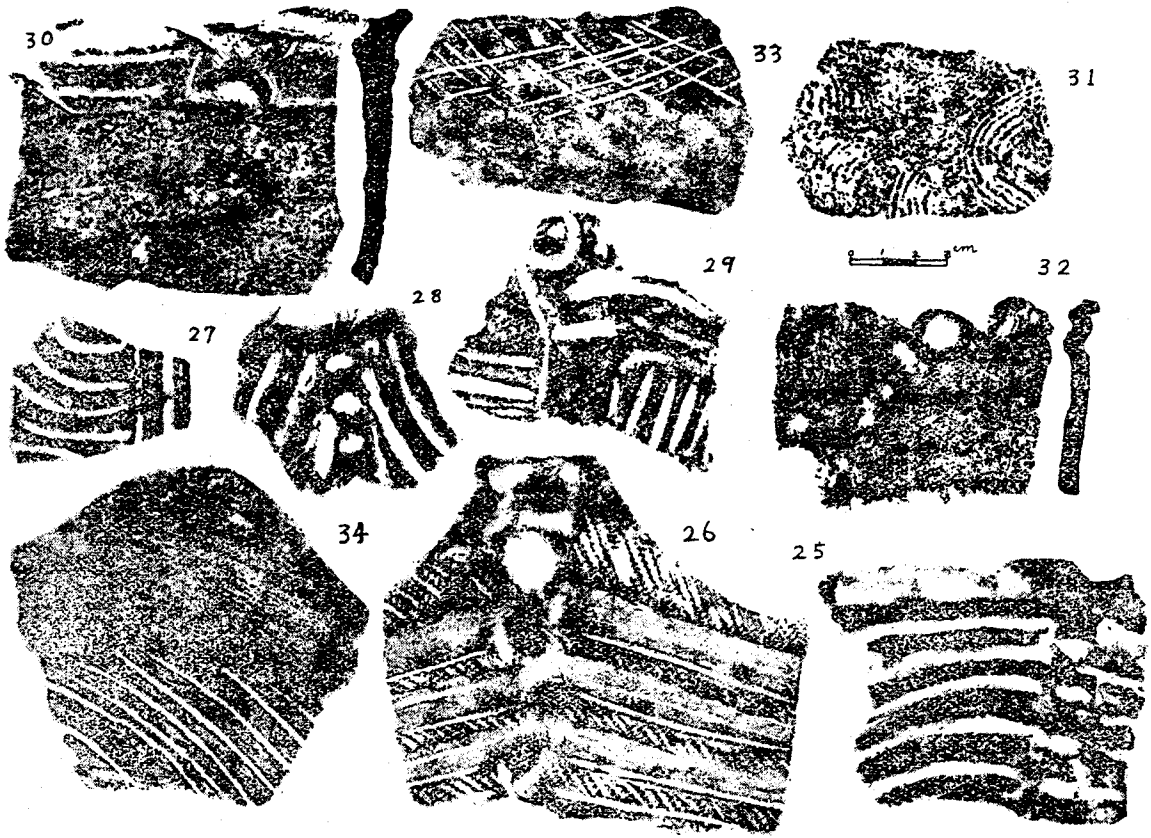
附　記

予等が踏査して以後、畑の一部が掘り下げられて、その土工事に参加した飯島勘一、桜沢重利両氏及美原中学の生徒達に依つて加曾利B式、安行式等の土器片が採集された。その中には磨製石斧の刃部の破片二個、緑泥片岩製の石剣破片一個、棒状土製品、土錘、袖珍土器、土製耳栓、土版等がある。

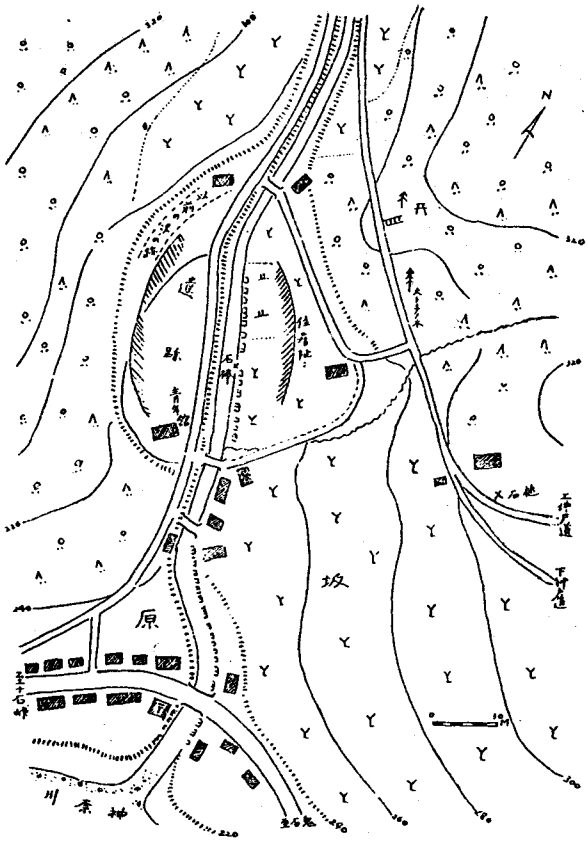
六　坂原遺跡

a　遺跡

保美濃山遺跡の上流四・〇粁、坂原聚落の直ぐ上にある。本年春桑畑を水田にする為深く掘つたため遺跡が発見されたものと言う。遺跡の標高は三〇〇米、坂原の聚落のある段丘が第一の河成段丘とすれば、これも第二の河成段丘上に



第13図　保美濃山遺跡出土遺物3　土器片



第 14 図　美原村坂原遺跡略測図（桜沢重利原図）

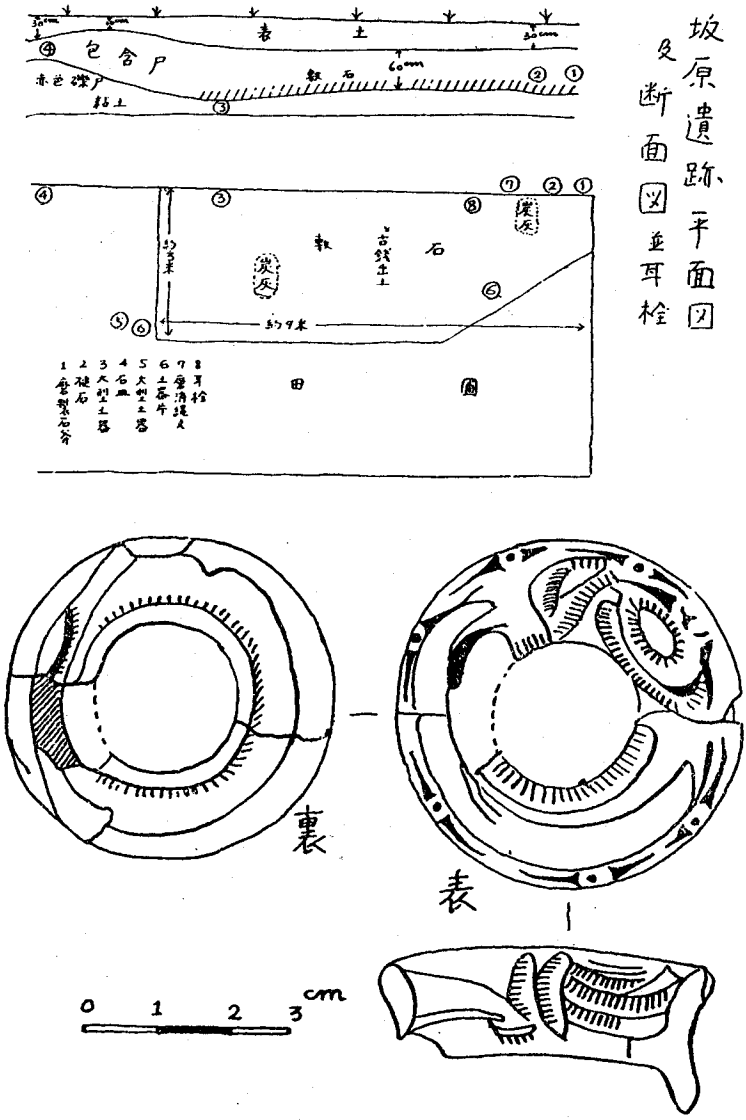
あるのである。坂原の聚落の一端に流れ込む一つの深い渓谷があるが、これに沿うた細径を登つて行くと一〇〇米ばかりで丹生神社の参道になる橋がある。遺跡はこの橋を渡つて、すぐのところから、その先の民家の辺まで、この方向に約一〇〇米程あるが、これと直角の方向では三〇米程にすぎない。遺跡のある地点は美原村大字坂原、丹生神社下である。遺物包含層の所在は非常に深く、上に壌土二〇糎、その下に礫まじりの土層約一〇〇糎があり、礫層約二〇糎の下に、同じ程の厚さの包含層がある（第一五図断面図参照）。これの下は殆んど純粋に近い礫層である。包含層の中からは以下の如き諸遺物が発見されたが、その位置は当時発掘に立ち会つた桜沢氏のノートによれば第一五図（平面図）の如くであつた。これに続く桑畑の深層にも遺物の包含は連続しているものと推定される。

b　遺物

(イ)　石器

坂原遺跡平面図及断面図並耳栓

イ 磨製石斧 ロ 礫器 ハ 槌石 ニ 石七 二個 ホ 石皿 巨大なるもの。緑泥片岩製で、使用しつくされて底に孔が明いている。



第 15 図

坂原遺跡平面及断面図

(ロ) 土器（第一六図1—4、安行式等、5、6不明、7底）

安行Ⅰ式、安行Ⅱ式、安行Ⅲ—Ⅳ式、安行Ⅳ式。即ち後期の末から晩期に亘るすべての土器がある。安行式の純粋遺跡である（加曾利B式もある）。

(ハ) 土製品

耳栓（第一五図下）朱塗で透し彫のある優秀なものである。

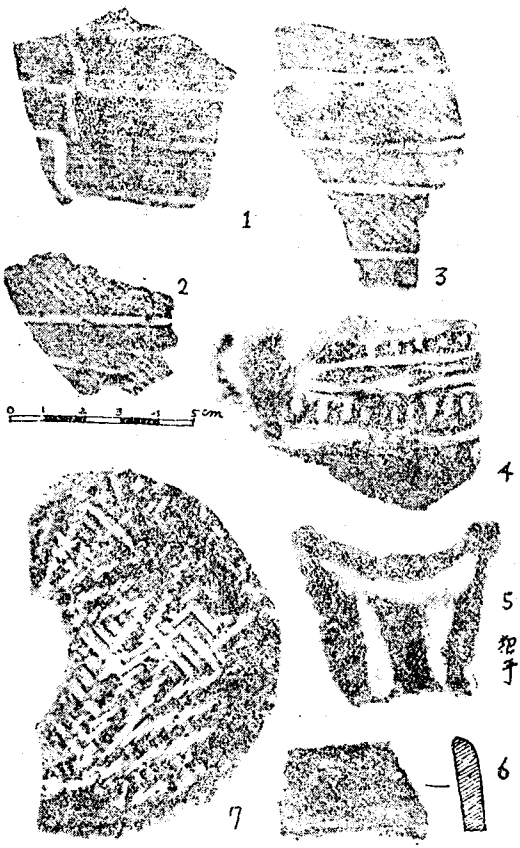
この外少量の木炭が出土した。耳栓や、木炭や、灰の出た地点は住居趾の疑もある。京元徳宝なる貨泉が出土している。

七　古指（こさす）遺跡

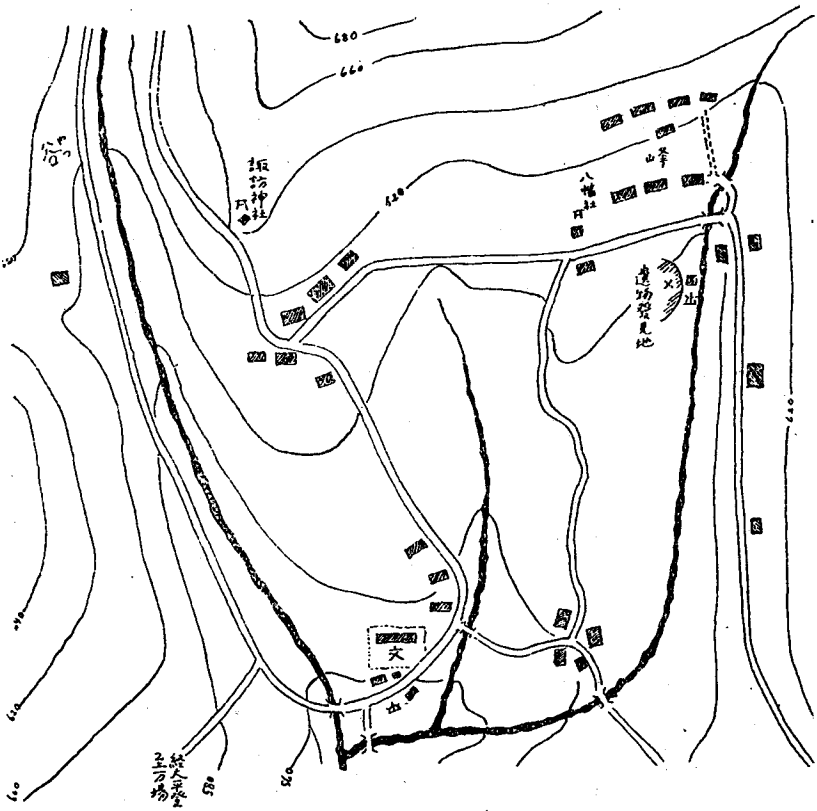
坂原遺跡から尙昇り続けた地点にある。標高は五〇〇米。土器は不明。今回は聞知したのみで実査しなかつた。

八　堂平（どうだいら）遺跡

これも坂原の上方にある峯に近い遺跡で、標高は四六〇米に達すると言う。土器は厚手である。堂平と言う地名が例の遺跡の伝説によく出て来るダイダラボッチを暗示するので興味がある。



第 16 図　坂原遺跡出土土器片



第 17 図　美原村坂原字法久峯遺跡略図（桜沢重利原図）

九　法久遺跡

a　遺跡

法久はこの山地の嶺に近い一つの聚落附近にある遺跡である。この附近の古い聚落は皆高地にあり、高い路程旧道で、瀬に沿うた十石峠道はごく最近に工作されたものであると言う。未踏査のため遺跡の詳細は不明である（上図参照）

b　遺物

(イ)　石器

イ　磨製石斧、ロ　石鏃、ハ　横型石七

(ロ)　土器

土器は加曾利E式と堀之内式とである。

(ハ)　土製品

土版？　中央に孔のある土版形のものが出土している。

一〇　太田部遺跡

a　遺跡

坂原遺跡の上流凡そ八・〇粁の地点にある対岸の遺跡である。太田部の聚落は標高四八〇米のところにある散落式の小部落で、本遺跡は更にその上の小さい平にある。遺跡の大半は現在桑畑である。散布している土器片の量は中量である。本遺跡の西南側にも東北側にも深い谷がある。これらの谷について見ると本遺跡も高くはあるが第二の河成段丘上にある如き観がある。本遺跡の行政区劃名は埼玉県（武蔵国）秩父郡上吉田村大字太田部字奥里である。太田部は大伴部の子孫だと言う伝説もある。

b　遺物

(イ)　岩石類

黒曜石片少量

(ロ)　石器

黒曜石製の石鏃が採集されていると言うが予は実見していない。

(ハ)　土器

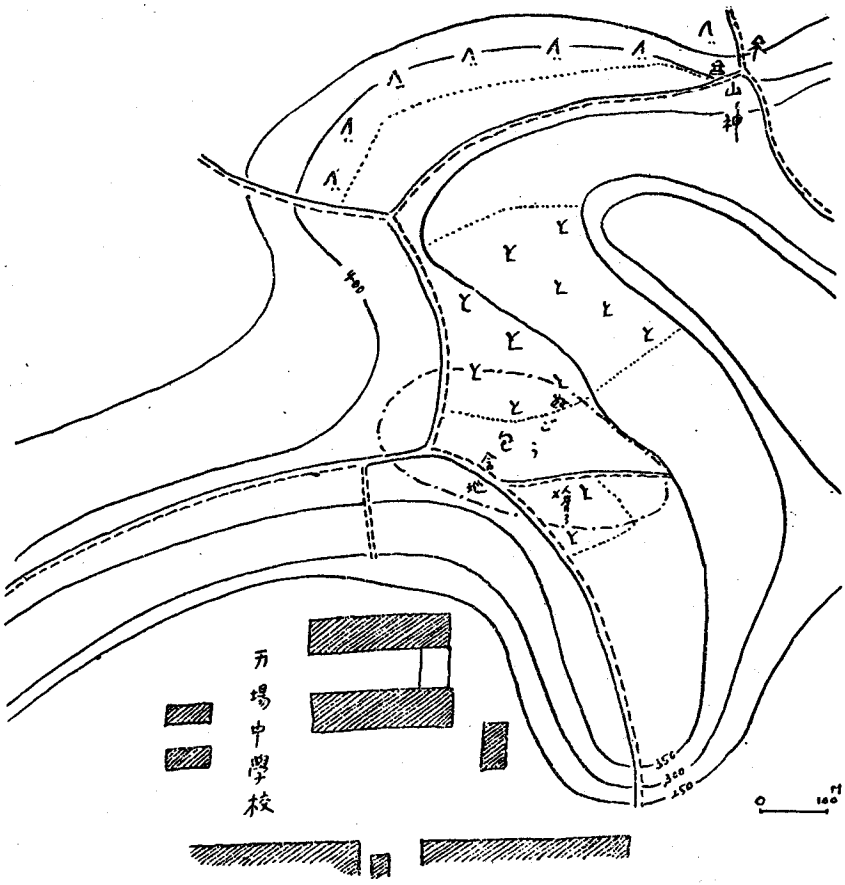
少量の黒浜式と諸磯式、大部分は堀之内式。彌生式も少量ある。

一一　相見遺跡

これも上記の太田部遺跡と殆んど同じような立地にある。一つの深い谷を距てて太田部と同じ標高のところにある。分教場の門の前から二、三〇〇米の位置にあると言うが、未踏査なので詳細は不明である。土器も未詳である。

一二　万場町ヌゴウ（或はノゴウ）遺跡。附、山ノ神遺跡。

a　遺跡



第 18 図　万場町ぬごう遺跡略測図（酒詰歩測原図）

万場中学校裏の舌状に突出した標高三七〇乃至四〇〇米の斜面にある。万場町はこの谷の中で鬼石町につぐ大きな聚落で、鬼石町から来るバスの終点になつている。新羽行のバスがさらにここから出発する。現在万場の聚落のある台地が第一の河成段丘で、遺跡はやはりその上の第二のものの上にある。が、ただその下に狭い一つの中間段丘ができている。土器の散布している範囲は東西約四〇〇米、南北約二〇〇米位らしいが、土器の散布は稀薄である。この附近では黒曜石の散布が遺跡の範囲を示す場合が多い。これは貝塚で貝の散布範囲が遺跡

の範囲を示すのと同じである。遺物の散布がすくないのは土を深くかぶつているためとも考えられる。遺跡の大部分は桑畑である。この遺跡の東北方にある山ノ神遺跡と言うのはこの遺跡から出た石棒を奉祀しているに過ぎないもので、これ自身一つの独立した遺跡と言うわけではなかろう。

b　遺物

(イ)　人骨　本遺跡から嘗て数体の人骨が発見され、下の寺に再埋葬されたと言われているが、これらが果して石器時代のものか否かは不明である。伴出物について問うて見たが、全くなかつたと言うことであつた。疑えば果して人骨か否かも怪しいかも知れないが、頭蓋もあつたと言うから、先ず確実であろう。

(ロ)　石器

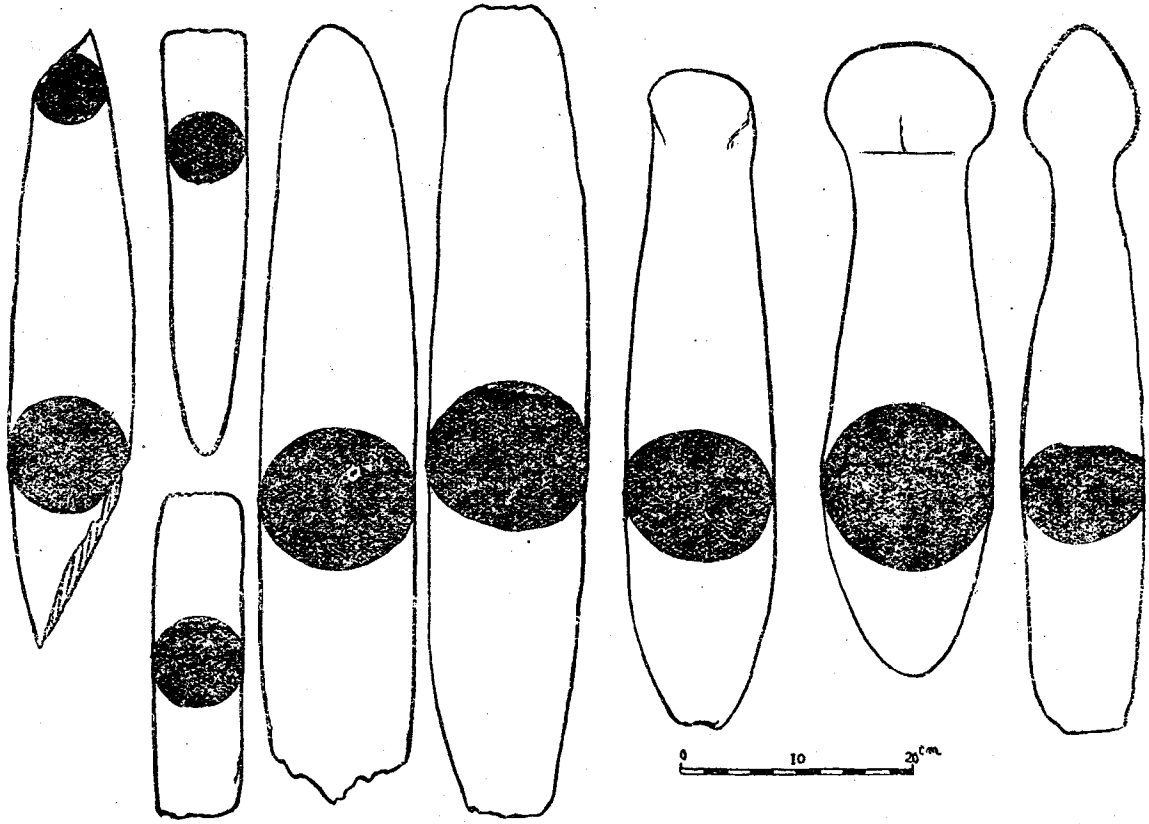
イ　石鏃　黒曜石製のものである。石鏃の完全なものはすくないと言う。予等が表面採集したところによつて見ても、黒曜石片はすくなくないようであつた。

ロ　槌石　棒状三個のものと、丸形二個のものと合計五箇存する。器形等譲原遺跡出土のものなどと、いずれも大同小異のものである。

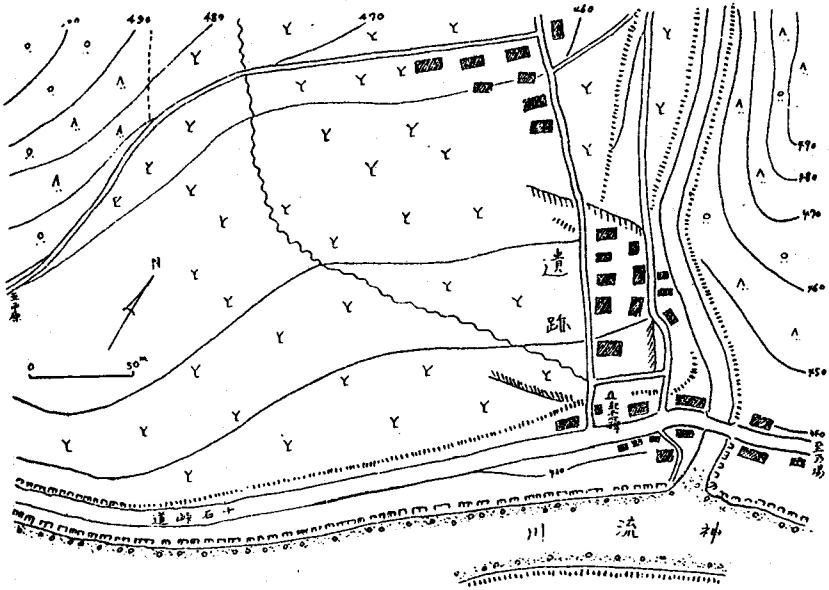
ハ　石皿

ニ　石棒　山ノ神に存するのは現長五〇糎、膨隆した一端の径一〇糎、くびれた細い部分九糎、次第に太くなつて破折した一端では再び一〇糎に達している。緑泥片岩製である。これは割竹を柱として茅萱でふいた高さ約一米ばかりの社の中に奉祀されている。新らしいものではなくて、石器時代のものであることは確実である。この谷には石棒が多く、到るところに建てられているが、皆古いもののようである。

(ハ)　土器　土器は主として堀之内式である。破片は小さく、僅に紋様のわかる程度のものしかない。しかし沈線文や、土器片の厚さ、土の粒子粗である等の点から、堀之内式であることは確かである。



第19図　万場町八幡神社所蔵石棒



第 20 図　中里村神ケ原遺跡略測図（桜沢重利原図）

附　記

万場町八幡社に第一九図の如き石棒が保存されている。出土遺跡は不明である。桜沢重利氏が調査したものである。

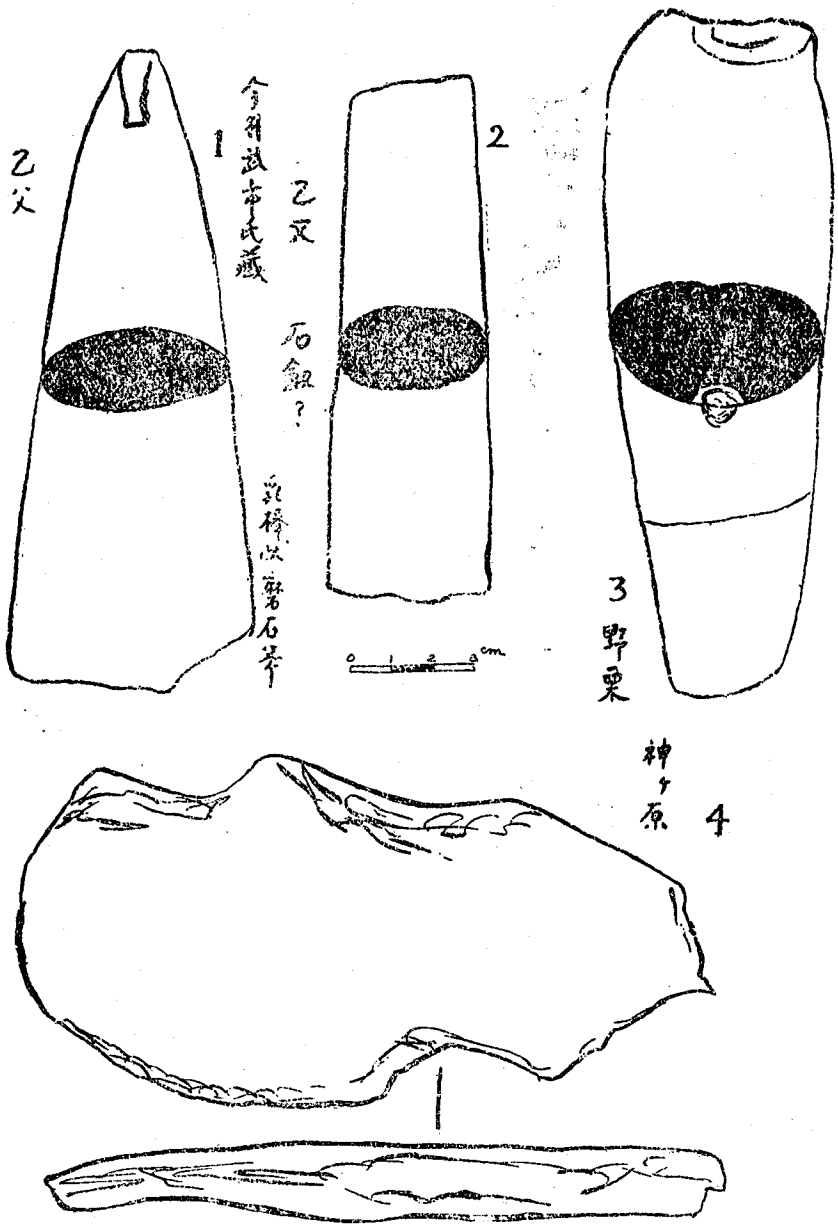
一三　神ケ原遺跡

a　遺跡

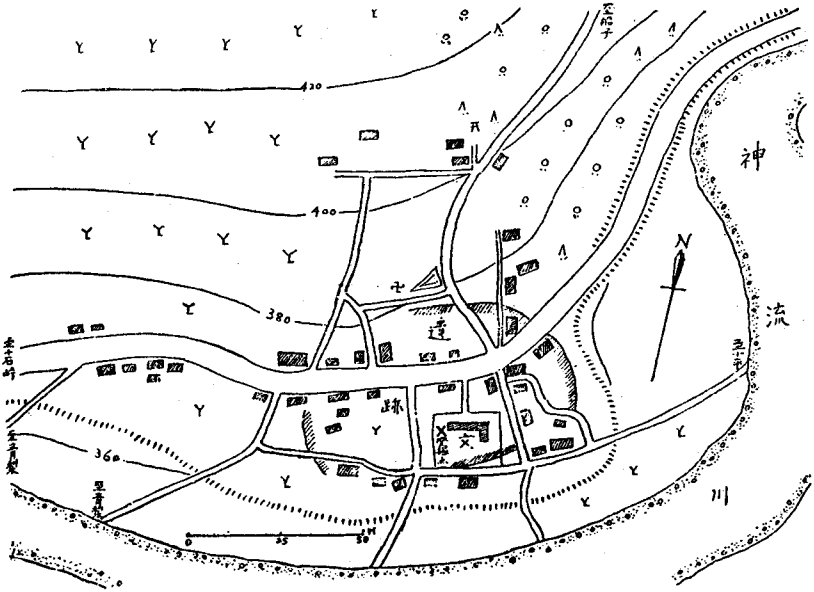
本遺跡は万場の上流一三・〇粁の地点にある。神ケ原は中里村の役場のあるところである。その一〇〇米程先の、橋を渡つたところの民家の裏に忠霊塔がある。この忠霊塔の裏の石垣の石を外すと遺物が入つている。遺跡はその背後の台地であるが、これも第二の河成段丘である。但し土器の破片は非常にすくなく、黒曜石の破片が僅かに採集される程度である。唯神社の西方に一地点殆んど麦ののびない地点があると言い、住居阯の存する疑いがある。遺跡の概略の範囲は三エーカー位ではなかろうか。本遺跡の所在地名は中里村大字神ケ原字原（忠霊塔上）である。

b　遺物

(イ)　石器



第 21 図　神ヶ原遺跡出土石器等



第 22 図　万場町相原遺跡略測図（桜沢重利原図）

予等は三個の石鏃片を採集したが、うち二個は硅岩、一個のみが黒曜石製であつた。この外美原村中学校所蔵資料の中に緑泥片岩製の打製石斧が一個ある。分銅形に近いものであるが、一端は不整形である。長さ一六・八糎、最大幅八・八糎、厚さ二・一糎。（第二一図4）

(ロ)　土器

忠霊塔背後の石垣内に収蔵されてあつたものは悉く加曾利E式である。約四〇片で、その中に底三片も混じている。浅鉢と深鉢で、これらは忠霊塔建設中に発見されたものだそうである。

一四　三津川（さんずがわ）遺跡

中里村の役場の丁度対岸にある遺跡である。神流川にかかつた釣橋を渡つて、民家の裏を登つて行くと神社（三体様）に出る。この境内が遺跡だと言うのである。芝刈に行つた土地の人が、夕立に降りこめられて、社殿に避難していたところ、雨だれ穴の中に光るものがあるのでひき出して見たところ三個の青石製の磨製石鏃だつたと言う。この話は半ば信じられるようでも

あり、半ば疑わしくもある。実査した結果によると土師のある遺跡であることはたしかであるが、彌生式があるか否か不明である。よもや銅鏃ではあるまい。

一五　相原遺跡

万場町の上流三・〇粁、相原分教場の周辺にある遺跡である。これは本調査の後に飯島氏等が聞知されたもので、昭和二三年夏発掘調査を行つた。その詳細は別の機会に譲ることとする。土器は堀之内式と加曾利E式と諸磯式である。

一六　野栗遺跡

野栗遺跡は楢原の聚落の手前の橋を渡らずにそこで合流する一つの支流について奥に遡つて行く方にある。上野村東校の資料に野栗沢出土の石器があるのを知つて（第二一図3参照）、予等はその遺跡の実査に赴いた。その石器を採集したと思われるひとの家に赴いて訊ねたが、本人既に死亡して遺跡の適確な位置を知ることができなかつた。然し狩屋と言う山畑が略それらしいと言うことであつたので、同家の令息に案内されて行つて見たが、同所は雨の度に土砂の流下のはげしいところで遂に遺物の有無は全く知ることができなかつた。本来この谷は山つなみの起りやすいところで、狩屋のすこし手前にも明治年間に土砂の大崩落があつて、十何軒かの家が全部埋ずまつて、未だに掘られていないと言う事実もある。この遺跡なども明治初年の墓が二、三〇糎も土砂にうずまつており、より古いものは墓石の半ばが埋ずまつていると言う状態であつた。上記の石器は緑泥片岩製で、刃部と茎とが幾分狭まくなつた乳棒状石斧で、二つに割れているが、長さ一七・〇糎、最大幅五・七糎、刃部の幅三・三糎、茎幅三・〇糎、厚さ約三・〇糎、中央の一面に打痕がある。これがあるからには本遺跡は黒浜式か諸磯式である筈なのであるが、発見し得なかつたのは残念であつた。深く埋没していると思うべきであろうか。悪く考えれば後述の今井平出土の誤伝とも考えられる。

一七　新羽遺跡

はしがき

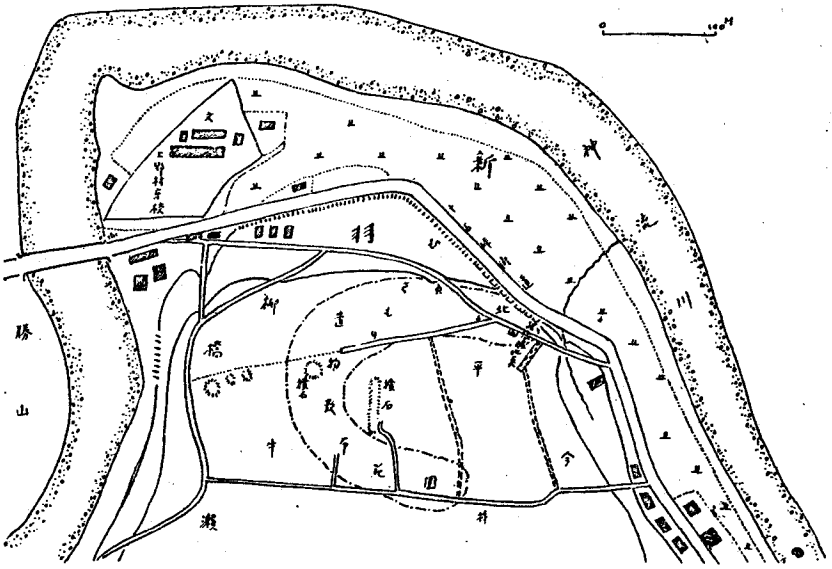
昭和二二年八月神流川流域遺跡巡検の折同月三日、上野村東校に赴き、翌日村長塚田武雄氏の案内で今井平遺跡を実査した。表面採集の結果珍らしくも土器が諸磯式であることを知りその旨を同校の中林氏に物語つたところ、非常に興味を持ち、塚田村長も又その重要性を認めて特に自分の持地の一部に於て試掘をなすことを許可され、東校の職員諸氏もまた嬉んでこの仕事を援助されることになつたので、予等は同日夕刻西校に出発しようとする予定を変更して、同日午後その計劃を実施し、同日夜及翌日午前中及帰途にさき得た数時間を以つて発掘資料の大部分を整理した。これらの遺物は悉く同校に置くこととし、石器類は図にとり、土器は藪野、宇野両君が拓影をとつた。この最後の仕事の為両君は尚半日と一晩東校に延長滞在したのであつた。ここに報告する結果は飯島、桜沢両氏の援助に加えて、上記の人びとの渾然たる協力に負うものであり、予の衷心感謝の意を表するところである。

a　遺跡

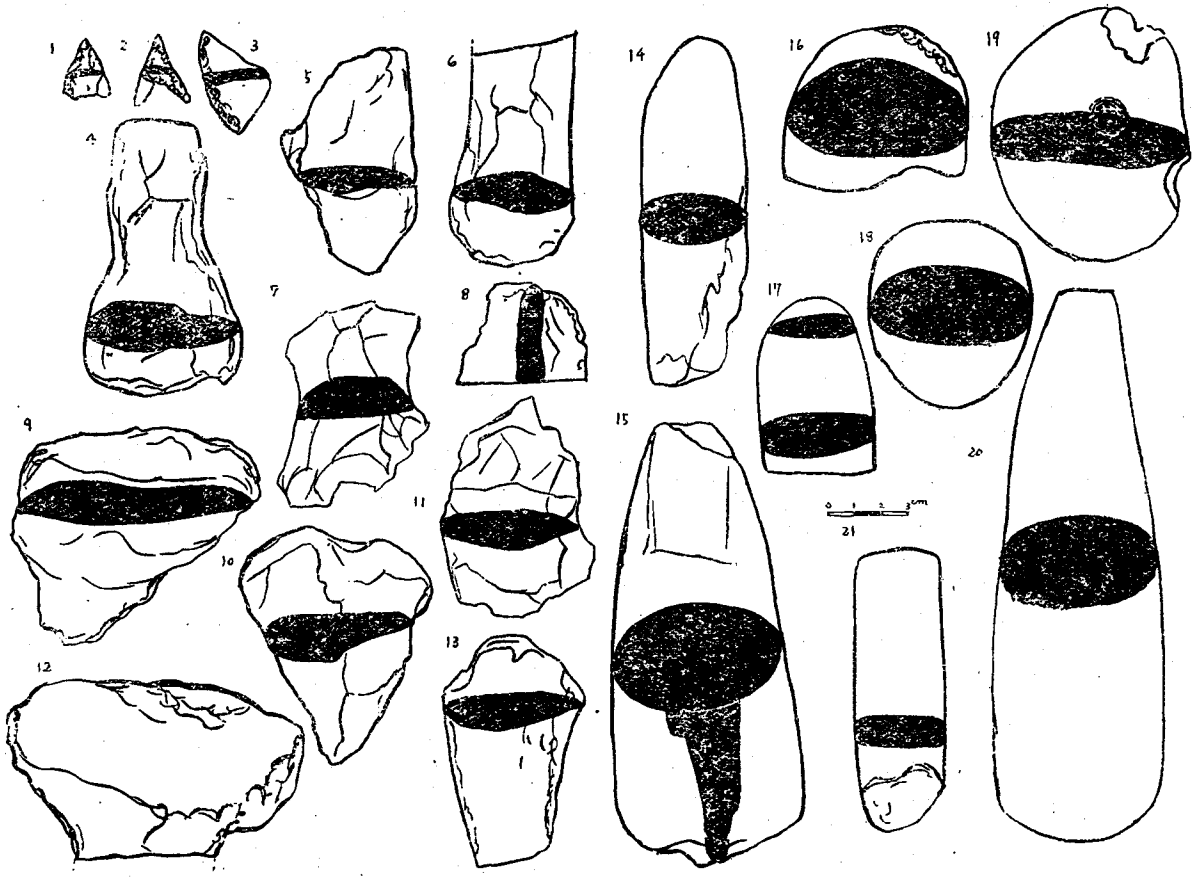
本遺跡は万場の上流一・八粁にある。所謂山中地溝帯にかかつた部分である。神流川は野栗沢の水を溶れてから、勝山の橋のところ迄大彎曲をする。この彎曲部の右岸には南北に長い一つの台地が突出している。この台地の標高は四〇〇米で大したことはないが、その約一五〇米背後には又四五〇乃至五〇〇米のこれと平行した台地がある。学校のある台地が第一段で、遺跡のある台地が第二段、その上が第三段で、典形的な段丘を示している。この意味で本台地は護原、保美濃山の諸遺跡と、同じ順位の段丘上にあるのである。現在十石峠道はこの台地の麓を通過しているが、その旧道はこの台の縁を辿つていたものだそうである。ただこの道に狭い外側部があつたと言うことであるが、それは殆んど全面的に崩落している。この旧道と略平行に、この台地の中央部に一つの作事路があり、これはこの台地の西端で、奥から来る崖端路と略直角に交叉している。この瀬の道も結局は学校の正門附近に下つて行く。この瀬の道に沿うて、三基の円墳のごときものがあり、台地の中央にも一基の大きな円墳のごときものがある。又それの東には二個の長い積石があるが、精査の結果これらはいずれも積石塚とも断定しかねる自然石の堆積であることがわかつた。

土器が散布しているのは、この中央の大きな積石の周囲から、その東南方と、その東北方とに延び、東北のものは前述の旧道に沿うて延び、大体半月形を呈している。この半月形の中心部及外方には土器片は殆んど見られない。この半月形の東北端部にある墓地及柿ノ木のある荒蕪地の附近は土器の散布が殊に濃厚である。予等が試掘を行つたのは、この東北端の更に極点に当る稗畑である。ここは旧道より一段低い畑地で、地主は上述の如く村長塚田氏である。この台地には北、今井、牛瀬、ムサモリ、柳橋の五字名があるが、遺跡に関係があるのは東端の北、山え寄つた今井、旧道側のムサモリの三字であり、発掘した地点はそのうちのムサモリの部分である。一般にこの台地は今井平とも呼ばれているから、これを遺跡名としてもよい。

当日発掘を開始したのは二時半。畑の隅に一・五米四方の一区劃を設け、表土から二〇糎ずつ掘つた。緩傾斜地なので上の方は二回と一〇糎、即ち五〇糎で砂利まじりの淡黄色の基盤に達し、下方は二回と三五糎掘つて漸く同一層に到達した。この床は非常に平なので竪穴の床



第 23 図　新羽遺跡略測図（漂詰歩測原図）



第24図　新羽遺跡出土遺物1　石器

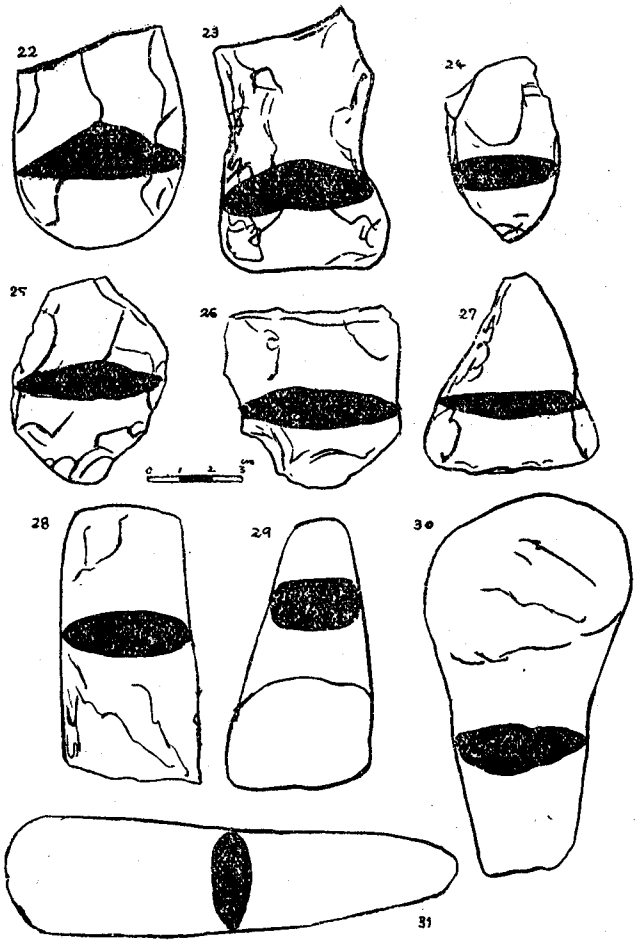
の疑いがなくもなかつたが、面積が狭いため穿明し得なかつた。四時半頃一休みして西の方へ一米延長して、これも二〇糎ずつ掘つて完掘したが、これだけ拡大しても尚床である確信を得ることは出来なかつた。発掘中得たものは多くの自然石破片、黒曜石小片、土器片等で特記すべきようなものの発見はなかつた。元の区を第一区、延長した部分を第二区として両方の区劃の土器片の出土量を表示すると以下の如くである（表省略）。

大体に於て本包含地は表土から土器片をまじえ、二〇糎ずつの成績を見る時は第二の層に遺物が最も豊富と言い得る。黄色の最下層以下には全く遺物がなく、その下は尚五〇糎を掘つて見たが変化は認められなかつた。

b　遺物

一　石器

イ　打製石斧　一、緑泥片岩製、茎と刃部を欠く。第一区第三層出土（第二五図24）二、同じく緑泥片岩製。これも中央部のみの破片である。第二区第二層出土（第二四図7）。三、これも緑泥片岩製のもの、残欠、第二区第三層出土（第二四図11）。四、緑泥片岩製の撥型の完全品。長さ一〇糎、下の広い部分の幅五・七糎、狭い方の幅約三・五糎、厚さ一・八糎。これは諸磯式の典型的なものである。第二区第三層出土（第二四図4）五、これも同上の残欠。第二区第三層出土。六、現長七・九糎。下の方がすこしふくらんだ長い形のもの。この先端部の幅四・四糎、上の狭い方の幅三・七糎、茎部が欠失している。緑泥片岩製。これも諸磯式に属するものであろう。第二区第三層出土。七、緑泥片岩製残欠、表面採集品（第二四図9）。八、同上。表面採集品（第二四図8）。九、分銅形の半欠品と思われるもの、現長六・三糎、幅一〇・三糎、緑泥片岩製、諸磯式に属するものでなかろう。表面採集（第二四図12）。一〇、緑泥片岩製。残欠。表面採集品（第二四図10）。一一、同上残欠。表面採集（第二四図13）。一二、第六に図示したのと同じ類のものと考えられる。現長約六・八糎、幅五・五糎（第二五図22）。一三、硬砂岩製のものの残欠。表面採集品（第二五図23）。一四、緑泥片岩製。礫器らしい疑いもある。現長六・五糎、幅五・〇糎、厚さ一・八糎（第二五図25）。一五、緑泥片岩



第 25 図　新羽遺跡出土遺物 2 石器

製の残欠品。表面採集（第二五図26）。一六、同上。表面採集品（第二五図27）。一七、現長九・〇糎、幅四・四糎、厚さ一・〇糎、断面は紡錘形、緑泥片岩製、短冊型のものの残欠品と思われる。塚田村長所蔵資料（第二五図28）。一八、砂岩製。撥形のもの、長さ一二・〇糎、広い方の幅六・七糎。狭い方の幅三・二糎、厚さ一・六糎。断面は略三角型。塚田村長所蔵資料。諸磯式に属するものであろう（第二五図30）。

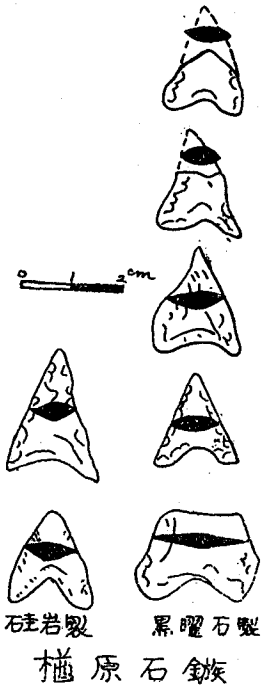
ロ　磨製石斧

一、緑泥片岩製。現長一二・二糎、幅一・九糎、厚さ一・九糎。断面は楕円形、表面採集品（第二四図14）。二、緑泥片岩製。現長六・五糎、幅四・〇糎、厚さ一・五糎（第二四図17）。三、緑泥片岩製。現長一六・五糎、幅六・八糎、

厚さ三・七糎、諸磯式に伴う乳棒状石斧の一種である。刃部欠失、塚田村長所蔵資料（第二四図15）。四、緑泥片岩製。現長一〇・〇糎、幅三・二糎、厚さ一・二糎、一端欠失、塚田村長所蔵資料（第二四図21）。五、長さ一九・九糎、幅六・一糎、厚さ三・一糎、断面楕円形、乳棒状磨製石斧である。硬砂岩製。塚田村長所蔵資料（第二四図20）。六、定角式磨製石斧。蛇文岩製、現長八・四糎、幅四・六糎、厚さ一・五糎。これは恐らく諸磯式に伴うものではない。塚田村長所蔵資料（第二五図29）。七、緑泥片岩製。全長一四・五糎。刃先幅三・七糎、厚さ一・三糎、断面紡錘形。これも乳棒状のものである。塚田村長所蔵資料（第二五図31）。

ハ　石鏃

石鏃二個のうち一個は底部の彎入の深い諸磯式のものである（第二四図2）。他の一個は全形は不明である（第二四図1）。その他第二六図参照。



第26図
新羽遺跡出土遺物3石鏃

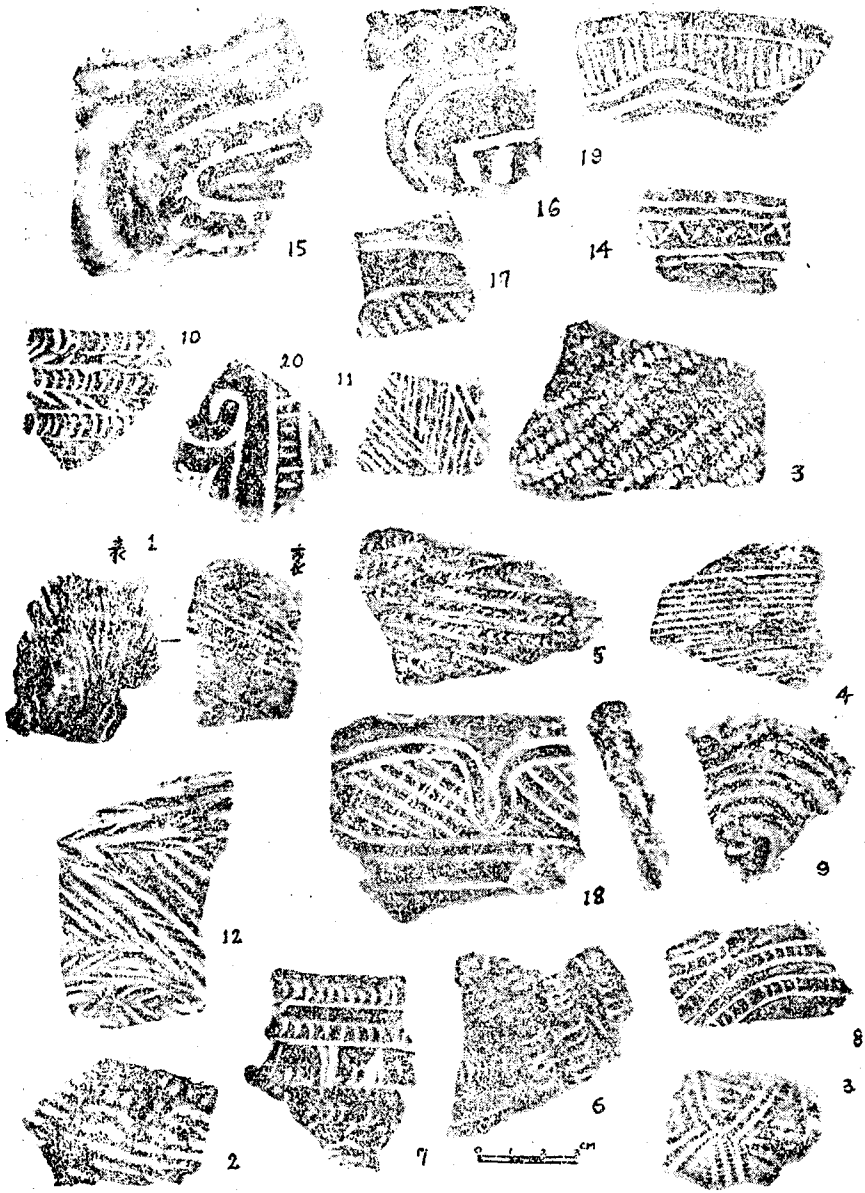
ニ　槌石

一、砂岩製。一面の中央に一個の凹みがある。長さ七・〇糎、幅九・三糎、厚さ一・八糎。半円形とも言うべき形で、その直線的な部分が使用面であつたと思われる。この方に二箇処の欠失がある。表面採集品（第二四図19）。二、これも円又は楕円形だつたと思われる。幅六・二糎、長さ六・〇糎、厚さ三・五糎、一端に打痕がある。第二区第三層発掘品（第二四図16）。

ホ　磨石

六・〇糎と六・八糎、厚さ二・八糎。一見自然石の如くであるが、表面はよく磨かれている（第二四図18）。

ヘ　石皿



第 27 図　新羽遺跡出土遺物 4　土器片

所謂蜂窩石と称すべきもの。これは氏神八幡社の拝殿に置かれているもの。然し今井平の出土品であることは確実である。

二　土器

イ　茅山式　三片。これらは最下層から出たのではない。第二層と第三層とにあつた。繊維を多く含み、内外面とも条痕のあるものである（第二七図2、3）層位的に明確ではなかつたが、発掘資料中に黒浜式が数片認められた。

ロ　黒浜式（第二七図2、3）層位的に明確ではなかつたが、発掘資料中に黒浜式が数片認められた。

ハ　諸磯A、B式（第二七図4～12）C式（第二七図13）の三式。A式が比較的すくなく、B式、C式が多い。

ニ　五領ヶ台式（第二七図14）多くない。

ホ　阿玉台式（第二七図15、16）ごく少量存する。

ヘ　加曾利E式（第二七図17～20）少量混入している。

ト　堀之内式　これは地域を異にして純粋遺跡があるものの如くである。

三　土製品

柱状土製品の断片。僅に見える文様から推定すると、諸磯C式のものかと考えられる。下面は円形で平であり、他端は自然に破切せるものの如くである。用途は不明である。

附　記

昭和二三年夏当遺跡を再訪。塚田村長をはじめ中林校長等の応援を得て、諸磯式の竪穴住居阯を発掘した。その時、先年発掘した地点と同じ高さの段で田戸式土器片、楕円押型文土器片等早期の資料をも発掘した。これによつて新羽遺跡は実に縄文早期以来、引き続き後期に到るまで人びとが居住したものであることを知つた。しかしよく考えて見ると、これは単に当遺跡だけの特徴でなく、諏原、保美濃山等すべての大遺跡に就いて同じ事実が将来発見されるものと考え

られる。と言うのは結局こうした狭い川岸に於て、住み得る土地は余りないのであつて、いつの時代にも、大体同じ地点を占拠していたものと考えられるのである。この点南関東地方面の低地居住跡とくらべて、著しい差点と考えられるのである。

一八　川和遺跡

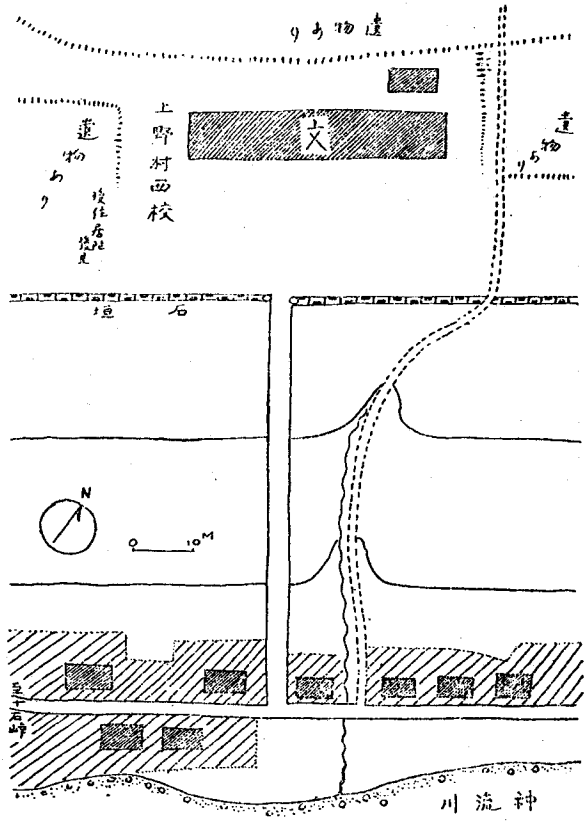
本遺跡は新羽遺跡の上流三・〇粁の地点にある対岸の遺跡である。磨製石斧と石鏃とが出土したと言うが、未踏査のため遺跡の詳細は不明である。現行政区劃は上野村大字川和。寺の附近と言うことである。

一九　川和諏訪神社背後遺跡

ここも深く掘ると遺物が発見されると言うことであるが、詳細は不明である。山中地溝帯には一般にかかる深い包含層があるのであろう。

二〇　乙父（おつち）遺跡

遺跡附近の旧家今井武市氏に石器が保存されているので、それと知られるのであるが、予等が踏査した限りに於ては殆んど全く遺物を発見し得なかつた。遺跡の範囲もそのため明瞭でないが、種々の点から推定して、東西一五〇米、南北七、八〇米位であろうか。すくなくとも大体その範囲に黒曜石片が散布している。これは包含層の埋没が深く、そのために土器の破片など一個も地表には現われていないのであろう。この遺跡は乙父の聚落の背後にあつて、新羽から登ること約七・〇粁の地点にある。新羽迄は万場からバスが来ているが、その先は一日に二回営林署のバスが上下するだけで、全く人里を離れた僻地である。本遺跡の大部分は桑畑で、乙父の聚落のある段丘より、僅に高いだけである。今井氏所蔵の石器と言うのは磨製石斧一個と、石剣の破片と思われるもの一個とである。前者は硬砂岩製で、刃部欠失。現長一五・五糎、最大幅六・〇糎、厚さ二・一糎、断面は楕円形である。後者は現長一二・七糎、厚さ二・一糎、断面は偏楕円形である（以上第二一図1、2参照）。石質は緑泥片岩である。附近の貫前（ぬきさき）神社の御神体となつている長さ七



第28図　楢原遺跡略測図（酒詰歩測原図）

○糎、周辺約二五糎程の片麻岩製無頭石棒も、恐らく本遺跡の出土品であろう。

二一　楢原遺跡

楢原遺跡は今回予等が実査した最奥のものである。乙父から三・○粁の上方にある。楢原聚落の上方に位置する上野村西校の周辺が遺跡である。同聚落のある段丘を第一のものとすれば、学校の直下の幅の狭いものが第二で、学校は更にその上の第三の河成段丘上にあることになる。現在の校舎の南側に新校舎を作ると言う話で、予等は自然面が残つている部分を採集し、更に現校舎の裏の第四段目を採集、次に校舎の北側及その一段下の畑も歩いて見た。最初の地点で、予等は堀之内式と思われる沈線文のある土器片を一片採集したが、他の地点に於ては黒曜石を数片拾得したにすぎない。第一の地点と、その断面とについて観るに、包含層は八〇乃至一〇〇糎の下で、相当に深い。若しこの部分が新校舎の建設のために削平せられるようなことがあれば、その時には相当遺物が発見されるはずである。本遺跡は南北に凡そ三〇〇米、東西に約一七、八〇米に亘るものと考えられる。

二二　十石峠東側中腹遺跡

八幡一郎氏著「南佐久遺跡調査報告」に記載しあるものである。詳細は報じられていない。

第1表　神流川流域遺跡総表（第二図参照）

番号／項目	遺跡名	異称	所在地	鬼石より距離	標高	広さ	編年	人工遺物	自然遺物	文献	備考
1	真下	堀之内	多野郡美原村大字譲原、真下及堀之内に亘る	1・3	160	200×50	加曾利E式、堀之内式	土器、土偶、石鏃	黒曜石		
2	譲原		同郡同村大字譲原、分教場周辺	2・0	160	300×100	加曾利E式、堀之内式、加曾利B式	土器、巨大なる打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐、石匕、槌、石鉢、石皿、石砥、石棒、土偶、土玉、土錘、袖珍土器	黒曜石、木炭、灰	飯島勘一「上野国多野郡美原村譲原遺跡」（昭二二、四）、略報桜沢重一・毛野利一・上野国多野郡美原村譲原遺跡プリント、昭二一、石器時代遺跡発掘	炉趾発見
3	上阿久原		児玉郡若泉村大字上阿久原前畑	1・8	160			土器、石鏃	黒曜石		
4	今里		多野郡美原村大字譲原字今里	5・5	180	100×100	加曾利E式、諸磯式	土器、石鏃	黒曜石		
5	柏ヶ舞		同郡同村大字譲原字柏ヶ舞	6・5	300			土器		（村人より聞知）	
6	保美濃山		多野郡美原村大字保美濃山天理教会周辺	10・0	240	200×150	諸磯式、領玉台式、坂台式、（勝阿鹿利E式）、加曾利E式、堀之内式	土器、巨大なる石斧、打製石斧、石鏃、槌、石棒、磨製石斧、石剣、発火石、耳栓、土版、土玉	黒曜石、木炭、灰		敷石住居趾、炉趾
7	前野		同郡同村大字保美濃山字前野	11・0	300			磨製石斧			

第1表 神流川流域遺跡総表（続き）

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
太田部（ぶ）	相（あい）見	梁（やな）場（ば）	法（ほう）久（く）	扇（おうぎ）谷（や）	堂平	古（こ）指（さし）	坂原	神（かん）戸（ど）	田黒	犬目
部後太田										
同郡同村大字太田部字後太田部	同郡同村大字太田部字相見	秩父郡上吉田村大字太田部字梁場	同郡同村大字坂原字法久	同郡同村大字坂原字扇谷	同郡同村大字坂原字堂平	同郡同村大字坂原字古指	同郡同村大字坂原字丹生神社登り口	同郡同村大字坂原字神戸	同郡同村大字保美濃山字田黒美原中学上	同郡同村大字保美濃山字犬目
			17・0	17・0			14・0	13・0	12・0	12・00
500	480	400	580～600	260			260	300	260	380
中	200×100								50×30	
黒浜式、磯式、堀之内式、諸磯式、堀之内式、彌生式	堀之内式		加曾利E式 堀之内式	土師	加曾利E師式 土	土師	安行Ⅰ式、安行Ⅱ式、安行Ⅲ式、安行Ⅲ式		阿玉台式	諸磯A式
土器、石鏃	土器	発火器	土器、石匕、磨製石斧、打製石斧	土器	土器	土器	土器、磨製石斧、礫器、石棒、槌石、石皿、耳栓、石木炭、黒曜石灰	槌石	土器、磨製石斧	土器

第1表　神流川流域遺跡総表（続き）

19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
布施	野合（ぬがら）	相原	宮地	笛竹	神ケ原（かがはら）	三津川（みつ）	野栗	新羽（にっぱ）	川和	
								今井平		
多野郡美原村大字坂原小字布施	同郡万場町野合より山ノ神に亘る	同郡同町字相原分教場附近	同郡中里村大字魚尾字宮地	同郡同村大字魚（よの）尾*字笛竹	同郡同村大字神ケ原字塔背後原、忠霊	同郡同村大字神ケ原三体様周辺	同郡上野村大字新羽字野栗（沢）	同郡同村大字新羽、今井平、サモリム	同郡同村大字川和、諏訪神社裏	
22.0	26.0	29.0	34.0	36.0	39.0	38.0	43.0	44.0	47.0	
500	370～400	370	400	700×760	440	440	490	500	540	
	400×200	100×50	100×50	大	100×100	小		200×150		
	堀之内式	諸磯式、加曽利E式、堀之内式	加曽利E式、堀之内式	黒浜式、磯式、諸磯式、阿玉台式、加曽利E式、堀之内式	加曽利E式、土師	土師？		押型文、戸式、茅山式、田式、諸磯式、黒浜式、阿玉台式、五領ヶ台式、加曽利E式、堀之内式		
土器	土器、石鏃、槌石、石皿、石棒	土器、槌石、石鏃、発火石	土器	土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匕	土器、石鏃	土器、磨製石鏃	？磨製石斧	土器、磨製石斧、打製石斧、石鏃、槌石、磨石、石皿、発火石、土製品、柱状	石鏃、磨製石斧	
	黒曜石人骨？	黒曜石			黒曜石					
（村人より聞知）										
					住居址？		遺跡の正確なる地点不明	試掘並びに発掘		

第1表　神流川流域遺跡総表（続き）

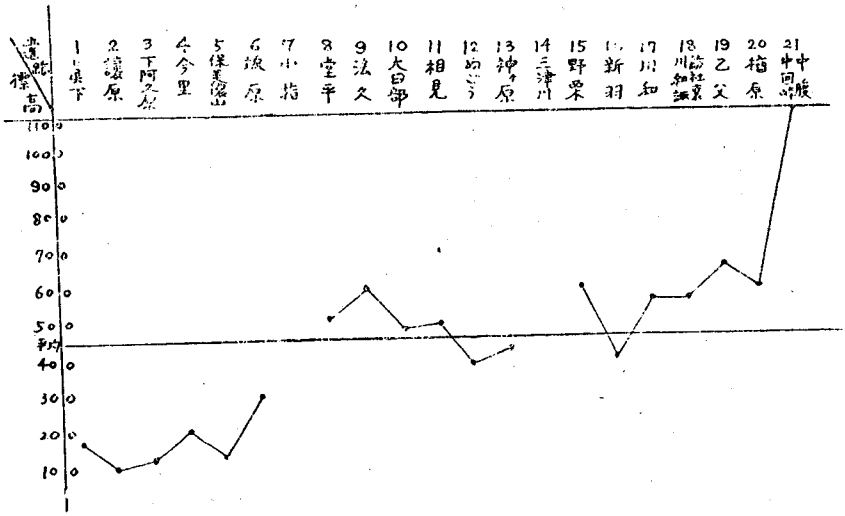
29	乙父（おつち）	同郡上野村大字乙父	51・0	540	150×180	後期	土器、磨製石斧、石棒		
30	橋原	同郡同村大字橋原西校周辺	54・0	600	20×100	黒浜式、諸磯式、堀之内式	土器、礫器、槌石、石鏃	黒曜石、硅岩、胡桃、人骨？	住居阯五
31	須郷	同郡同村大字橋原字須郷		660			定角式磨石斧		
32	白井	同郡同村大字白井	56・0	800			土器	（村人より）	
33	十石峠中腹	同郡同村大字水戸、十石峠中腹	62・0	1340				八幡一郎「南佐久郡考古学的調査」附図	

Ⅱ　文化概観

一　遺跡について（第一図参照）

分布　遺跡間隔は最も遠いものは坂原、ぬごろ間の二六・〇粁、ぬごろ、神ケ原間の一四・〇粁、神ケ原、新羽間の一一・〇粁等である。平均間隔は約七・〇粁である。平地方面の遺跡が大略一・〇粁ごとにあるのに対し、約七倍に近い。然しこれらを三つの群にわけて見ることもできる。第一は美原村群、第二は万場町群、第三は上野村群である。第一の群に属するものは一四個で、その平均間隔九・〇粁。第二群五箇処。その平均間隔は八・〇粁。第三群六箇処で、その平均間隔は七・〇粁である。

標高　上述の如く遺跡は大体第二の河成段丘に載つているものが多い。勿論例外もある。標高の最も高いのは十石峠中腹のもので一三四〇米。これはその現状がよくわからぬから、これを除くと、次は白井の八〇〇米、最も低いのは護



第 2 表 神流川流域遺跡高距表

原等の一六〇米、平均して見ると四六〇米である。南作の遺跡が六〇〇乃至一四〇〇米にあるのと比すれば大分低い。これも上述の三群にわけて見ると、第一群は最低一六〇米、最高六〇〇米、平均三七〇米。第二群は最高六〇〇米、最低三七〇米、平均三九〇米、第三群は最高一三四〇米、最低四〇〇米、平均六〇〇米。これらを表示すれば第2表のごとくである。野栗から楢原迄の諸遺跡は山中地溝帯に属している。

立地 石器時代の人びとが、はじめてこの地域に入り込みはじめた時に、尾根道を択んだか河原道を択んだか、興味ある問題である。これは通路に関することであるが、居住するとなれば、どうしても水の湧く場所を求めねばならぬ。とわ言え神流川に直面した遺跡は譲原ぐらいで、他はみな川から離れている。離れてはいるが、やはりいずれも湧水のあるところで、太田部のごときもその好例である。一方に谷があり、一方に湧水のある平が遺跡地になつている。譲原では詳細に検討した結果、それが第二の河成段丘にのつていることを知つたが、他のものも殆んど例外なく、ただ譲原遺跡だけが第三段まで及んでいる。平は一般に日光の照射が充分で、必ずしも南に向つたもののみが択ばれてはいない。

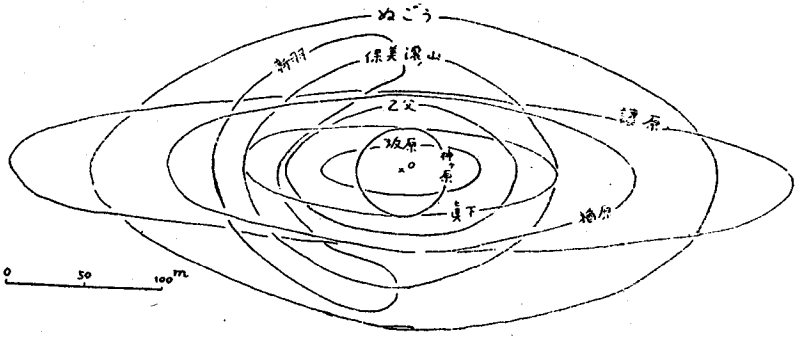
上記の峯道に関係した遺跡としては堂平、法久、相見、笛竹等を挙げることができる。これらは低い位置にある遺跡よりも探しだしにくい関係もあつて、今後にその精査を待たねばならぬ。

広さ　遺跡の範囲は土器片、黒曜石片の散布で推定できる。新羽遺跡では、遺物散布範囲が馬蹄形状を呈することがわかつたが、その他の遺跡では大体円、楕円等で、その中心部に遺物があるか否かは明瞭でなかつた。広いのは譲原（中期、後期）、ぬごう（後期）で、狭いのは坂原（晩期）、神ケ原（中期）である。各遺跡の広さを比較して見ると第3表のごとくである。

層位　表土は一般に深い。第三群に於ける諸遺跡は表土がことに深く、発掘は行わなかつたが、野栗及川和はその最たるものらしい。遺物包含層は大体二〇～四〇糎で、余り厚くない。包含層の下は一般に赤土色の砂を混ずる砂利層である。各層とも大小礫片が多く、発掘は容易でない。殊に万場附近迄は全部青石が露出している状態で、従つて遺跡の礫の大部分はこの青石である。石器にもまたこの青石が多い。

住居阯　住居は勿論竪穴であつたろうが、有名な譲原の如き、この地域の代表的住居阯と言い得るか否か、なお疑問である。勿論その炉の附近に、厚く粘土を敷いて住んでいたとすれば、これは住居であつた可能性もあるが、石の凹凸がひどすぎる上に、柱穴、壁溝、壁等も判然りしない。敷石住居阯とも見られない。むしろ真下、保美濃山の一部に発見された敷石住居阯（果して住居阯

神流川流域遺跡面積比較図



第 3 表　神流川流域遺跡面積比較図

かいなかは別問題として）のごときものが、一般に多いのではなかろうか。それにしても諸磯式土器を最も多く出す新羽遺跡の住居阯が如何なるものか早く知り度いものである。註1

註1　その後昭和二三年予は新羽遺跡で一住居阯を発見したことは前述のごとくである。

二　遺物について

人骨　ねごう遺跡の一部から人骨が出で、寺に葬むつたと言われているが詳細は不明であつた。頭蓋もあつたと言うから間違なかろう。ただ時代がいつごろのものか、それが解らなのが残念である。

自然遺物について　獣骨等どこの遺跡からも一片も、出土せず、石片殊に黒曜石と、灰と、木炭がある位のものである。黒曜石は貝塚に於ける貝殻のごとく、この地域では遺跡の範囲を示すので重要である。又これが交易関係を示す材料であることも注目に値する。渡辺仁氏の検討によれば、これらは信州産のものであると言う。同氏の調査によれば北関東には主として信州の黒曜石が分布しているよしであるから、十石峠を経て、後者の地域へ、前者から運び込まれた訳であり、神流川は、その交易の通路に当つていたことが明かである。なお神ケ原遺跡附近

第4表　神流川流域出土遺物概表

遺物 / 遺跡	早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	生式	師	人骨	黒曜石	木炭	灰	磨製石器	打製石斧	石鏃	磨製石斧	磨製石鏃	〃 B	石鏃無柄	石鏃有柄	石ビ	石錘	石棒	石皿	石砥	磨石	石製品	発火石	土偶	土玉	土錘	土製耳栓
貝塚下原				●						●																			●			
貝塚阿久原			●	●		●				●	●	●		●	●			●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
下原遺跡		●	●	●																												
保坂遺跡		●	●	●						●	●	●		●	●				●	●			●					●				
堂原遺跡					●					●	●	●	●												●			●				●
法平遺跡		●	●	●															●													
大久保遺跡		●	●	●																	●											
ぬ部遺跡		●	●	●			●													●												
神ケ原遺跡		●	●	●					?	●																		●				
三田遺跡			●							●																						
野ごう遺跡							●								●								●									
新津遺跡		●	●	●														●														
川栗遺跡																	●															
乙羽遺跡										●					●																	
橋和遺跡																	●															
父原遺跡				●																●												
原遺跡				●						●					●					●												
	1	3	7	11	3	1	1																									

の某氏は径三糎に近い黒曜石塊を発見所持していた。関東地方の平地方面の遺跡に多く発見される秩父片麻岩は、この谷及隣りの秩父の谷の特産品であつて、それ等はこの辺を原産地としているものであることが推定される。

人工遺物について

イ　石器

a　礫器　坂原遺跡から、晩期の礫器が出土している。これは後期殊に晩期の貝塚にあらわれるものと、全く同じ方法で作出されているものでよく解る。自然に破砕した石片も非常に多いので、判定はなかなか困難である。

b　打製石斧　前期の諸磯式を出す新羽遺跡には撥形のものがあり、後期の土器を出土する譲原、保美濃山等には短冊形及分銅形のものがある。仲に巨大なる打製石斧があることは注目すべきである。重いこれらのものは恐らく木を伐る手斧などに用いられたものではなかろうか。何となれば、この種のものはこの附近特有のもので、山の生活に特に必要なものであつたと考えられるからである。打製石斧の石材は八割迄が秩父片麻岩である。

c　磨製石斧　乳棒状の磨製石斧が野栗沢と新羽とから出土している。これは勿論前期の黒浜式、諸磯式に伴うものである。定角式の磨製石斧は譲原、坂原、法久、乙父から出土している。法久、乙父のものは中期の縄文土器に伴う、肉の厚い、稜の弱いもので、譲原のは後期のもの、坂原のは晩期のものである。後者は蛇紋岩質の小形のものであるが、他は悉く緑泥片岩製である。

d　石鏃　どの遺跡からも出る。前期の新羽遺跡のものは無柄であるが、後期の譲原のものは有柄が絶対に多い。しかもそのつき方が非相称的である。このような石鏃の例は渡辺仁氏の教示によれば盤城の一部にあり、他には稀だと言うことである。石鏃の石材は九割五分迄が黒曜石で、各遺跡から発見される黒曜石片の多くにも石鏃の破片又はつくりかけと見られるものがある。三津川の磨製石鏃と言うものはいかなるものか、或は彌生式に属するものかも知れぬが、残念ながら実見していない。ただこれらは青石製のものだつたと言うことである。又有柄石鏃の柄のつけ根が高く抉ぐ

り込まれず、水平か又は凸出していることは注目すべきで、渡辺仁氏の教示によれば、前者は信州のものの一つの特徴であるのに対し、後者は関東のものに普通見られるところだと言う。石鏃から見てこの附近の文化の特徴はなお関東的であるのである。

e　石匕　譲原からつまみのある横型の楕円形のものが出土している。黒曜石製である。法久からも出ていると言うことだが、実見していない。一般に石匕は多くない。

f　石錐　譲原から頭部の膨隆したものと直線的なものとが出土している。いずれも黒曜石製である。

g　石棒　譲原、保美濃山、ぬごう、中原（追加）、乙父等の中期又は後期の遺跡から出ている。無頭のものと、一頭又は両頭のものがあり、頭部の膨隆の顕著なものと、しからざるものとがある。一般に太いものが古く、後期のものは幾分細いようである。ぬごう、乙父等では、これらが御神体になつている。石材は悉く緑泥片岩である。関東低地のこの種のものが、石材が運ばれてその地で製作されたか、或は既成品が移出されたものか興味ある問題である。青石製が低地に余りないところから見ると、後者の場合の方が可能性が強いようである。

h　石剣　後期の譲原遺跡から出土している。石の材料はこれも緑泥片岩である。

i　石皿　石棒と石皿はのみとつちの如き関係のものである。譲原、坂原、ぬごう、新羽に標品がある。新羽には前期の安山岩製の簡単な形の石皿の破片があり、その附近の八幡社には、恐らく同遺跡から出土したと思われる青石の蜂窩石が奉献してあつた。譲原のものは青石製で、有脚で、縁の分化も顕著である。その他坂原に硅質片麻岩製の石皿とも砥石とも見られる巨大なるものがあり、五六×四八糎で、三角形で、その底は磨りへつて穴があいている。なお発火石は保美濃山からも出ている。

j　砥石　譲原に二条のすじのある小形の簡単なものが出ている。上記の坂原のものもこの類かも知れない。

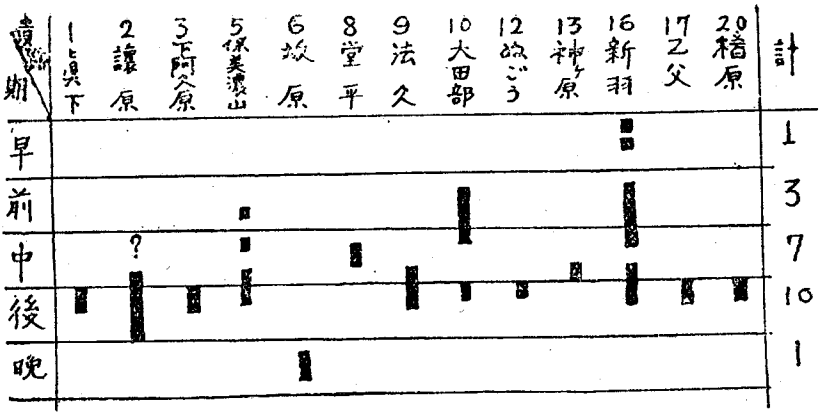
k　錘石　譲原には両端を打ちかいた簡単なものと、絲かけのための溝のある精製品とがある。この他の遺跡にはな

お今のところ発見されていない。

1　槌石　譲原、保美濃山、ぬごう、新羽等から出土している。新羽のものは槌石と言うが、むしろ磨り石に属する類のものである。その他の遺跡のものは縦に長く、一方に打痕のあるものが多い。やはり青石製である。

ロ　土製品

a　土器　南佐久地方には八幡一郎氏の著書によれば、押型文等早期縄文土器が出土しているようであるが、この地域からは尚発見されていない。註1 最も古いと思われるものは条痕のある土器であるが、これは新羽遺跡から黒浜式と混出したもので、層位的に見て、これは恐らく黒浜式のもので、茅山式ではなかろう。同遺跡の土器片には小量関山式と思われるものが含くまれている。新羽遺跡の主体土器は黒浜式と諸磯式で、後者が殊に多い。貝文や、平行線文のみのものはすくないが、常陸にある浮島式のものでもなく、関東平地の諸磯式と大差はない。又諸磯C式の破片もある。南佐久方面にも諸磯式の遺跡が多いようである。諸磯式はこの外保美濃山からも少量出土している。新羽遺跡のこの種の資料はこの地域の中期への土器の変遷を示すので重要である。それは諸磯C式或は十三菩提式などと称せられるものから、五領ケ台式なるものに移行し、次に雲母を含む阿玉台式に遷るが、あとは加曾利E式で、勝坂式に該当すべきものがない。譲原、保美濃山、法久、神ケ原にも中期の土器が発見される。これらのうち法久と神ケ原は加曾利E式と思われるもののみを出し、譲原、保美濃山には阿玉台式らしきものと、加曾利E式の古いものと、新らしいものとがある。古式の加曾利E式の中に或は勝坂式と疑われるものも少量存するが、余りすくないから多分勝坂式でないものと見てさしつかえなかろう。後期でこの地域に最も多いのは堀之内式である。堀之内式は真下、譲原、下阿久原、保美濃山、法久、太田部、ぬごう、中原、新羽、檜原から発見され、新羽をのぞき、他の殆んど全部の遺跡から主体土器若しくは純粋に近い量で出土する。堀之内式のころ、この地域は特に繁栄したのであろう。加曾利B式、安行式になると、譲原に少量見られるのみである。安行Ⅱ—Ⅲ式、安行Ⅲ式等の所謂晩期縄文土器の純粋遺跡である坂原遺跡の存在は、この地域と



第5表　各遺跡編年表

しては珍らしいことであるが、この遺跡は余り大きく掘れない立地的制約を受けている。彌生式土器の破片は太田部の一部と新羽遺跡の遺物中とに数点認められたが、その純粋遺跡はなお認められていない。太田部のは細かい縄文のある、恐らく彌生式の中期のものである（第5表参照）。

註1　昭和二三年発掘で新羽遺跡で発見された。

b　土偶　譲原から出た三個が現在見られる。うち一個は山形土偶、今一個は木兎形らしきものの破片である。前者が加曾利B式に伴うもので、後者は安行式のものである。今一つ腕の先が尖つたものは、これの類品が南佐久郡栄村から出土している。[註1] 多分堀之内式に伴うものであろう。真下からも出ていると言うが実見していない。

註1　八幡一郎「南佐久遺跡調査報告」参照

c　土版　保美濃山から、予等の調査した後、飯島氏等が発掘して獲たものが一個ある。附近から安行式が出土したと言うことである。

d　土玉　土製の玉である。譲原より出土。扁平なものである。

e　土錐　管状のものである。これも譲原から出土した。

f　土製耳栓　透し彫りで赤色塗抹。晩期の坂原遺跡から出土している。

三　概観及考按

石器時代の早期から、既に人がこの地域に住みついた痕跡がある。その後、前期の関山式、黒浜式、諸磯式と引続き人数を増し、聚落を増して定

住し続けて行つた。彼等は尾根道を辿つてこの地域に入り込んだか、河原を伝わつて来たか興味ある問題である。今のところは河原に寄つた遺跡が多く発見されているが、法久、笛竹の如き、嶺附近の遺跡も今後多く発見される機会があろう。いずれにせよ、黒浜式、諸磯式の遺跡は関東平地方面のみならず、南佐久方面にも存在し、この両者を結ぶ交通路が、この地域の遺跡である。殊に前期を過ぎて中期、並びに後期の遺跡が、この地域の上、中、下各域に亘つて平均して存することは、この地域が各期を通じて、同じように、山地と平地の交通路たりしことを示すものであろう。注目すべきは黒曜石と、緑泥片岩とである。この両者の石製品は各期の遺跡を通観して、その量に余り増減がない。これは黒曜石の通る量が、各時代とも余り著しい差のなかつたことを意味し、緑泥片岩などの利用も、最初から予想以上に盛んであつたことを示すものであろう。緑泥片岩の磨製乳棒状石斧、石皿は、関東低地方面の黒浜式、諸磯式遺跡に多く発見されるのであつて、その原石がこの方面から運搬されたか、或は既製品が運搬されたのかは考慮すべき問題である。これについては、かかる石の石理を見わけ、それの加工に精通した人が各地にいたと考えるよりも、かかる石の原産地にその種の人がいて、製作し、各地へ移出したと考える方が可能性が多いようである。中期の同じ石質の石棒に関しても同様である。とに角鬼石の街はずれから、万場附近まで緑泥片岩の露頭つずきで、この地域が、隣りの秩父の谷と共に、緑泥片岩の二大産地であつたことが頷かれる。

一般的に考えて、人びとがこれらの谷に生命をかけて入りはじめたのは、やはり食糧事情がそうさせたためと見なければなるまい。それと同時に良好な石材のあることが認識され、その交易が低地方面の人びとと開始されたのであろう。これと同じ人びと或はその子孫が信州に入つて、黒曜石の産地を発見したと考える必要はない。多分又別の人びとの群がそれの存在を知り、それを利用しはじめたのであろう。そしてそれが又関東平地方面で、必須の石材であり、この谷を通じて、それを運搬することが便利であることが解つた時に、この谷の聚落はそうした交易のための一つの宿駅の如きものになつたに相違ない。ただ同一の旅人が石を売り歩いたか、聚落から聚落へ物資が流転したかは、両方の場

遺物＼期	人骨	黒曜石	木炭	灰	礫	粟器	打石斧	磨石斧A	磨石斧B	石鏃	石ヒ	石錘	石棒	石剣	石皿	石砥	槌石	磨石	発火石	土偶	土玉	土錘	耳栓	遺跡
前期		•					•	●		•					•			•	•	•				8
中期		•					•	●	•	●				•	•			•						8
後期	?	●	•	•			●		●	●	•	•	•	•	●	•	●			●	•	•		16
晩期		•	•	•	•	•		•	•						•	•	•						•	11

第 6 表　神流川流域各期遺物目録表

合が存したと、漠然と考えて置く方がよかろう。平地方面から齎らされた交換物資の主要なものは、先ず塩であつたと考えざるを得ない。また上述の事実によつて、この地域の人びとが、一方的に関東の側からのみ入つたと考える必要もなく、やはり佐久方面からの侵入もあつたものと考えざるを得ない。ただしこの地域の文化は尚全く関東的であつて、決して信州的ではない。現在の風俗、習慣、言葉なども又そうである。然しこの地域の文化には、又それとしての発展のあつたことが見られる。

前期の頃には乳棒状の磨製石斧、撥形打製石斧、磨石等が緑泥片岩で出来ており、その外無柄の黒曜石鏃、安山岩製の石皿、槌石等が、まずこの時期の石器のすべてである。

中期のことはよくわからぬが、勝坂式がすくなく（或は皆無か）、雲母の混入の多い阿玉台式が優勢のようである。判然りするのは加曾利E式で、この時期には打製石斧、乳棒状磨製石斧、定角式磨製石斧、石鏃、石棒、石皿、槌石が認められる。石鏃は黒曜石製で神ケ原にはその原石塊があつた。黒曜石の出土量が、中期でも、前期のものと大差のないことは既に述べた。神ケ原遺跡は比較的小さく、新羽遺跡よりも小さい位であるが、前者は深く土をかむつているのであろう。

後期の遺跡になると、その遺跡数も前期の倍位になつて来る。後期の遺跡はその面積も広い、且つ川に沿うて長いのが一つの特徴でもある。人口も増加して来たのであろう。各種の形式の打製石斧、殊に分銅形のもの、大形の打製石斧が発見され

る。定角製磨製石斧の中には蛇文岩製の小形のものもある。有柄石鏃が非常に増える。前期から飛躍的と言う程ではないが、黒曜石屑の量が増加するのも事実である。石錐、紡績に用いられたかと思われる錘石、石棒、石剣、石皿、石砥、槌石等、各種の石の道具が出現し、土製品で土偶、土玉、土錘等まで造られている。この期の遺跡は、勿論、南佐久方面でも著増している。彼我相当頻繁な交通の存したことが想像される。

特にこの巨大なる打製石斧であるが、これは関東低地方面の諸遺跡では、殆んど見かけないもので、後期の所産と思われる。有肩石斧的なものはなく、土掻きとは考えられない。恐らくは原始林の太い樹木を伐採して、道路等を改修したり、所謂山仕事に使用されたものではなかろうか。

これだけでなく、遺跡は大きくないが、純粋の後期縄文土器遺跡が、坂原で発見されている。ここでは埼玉県真福寺貝塚と同じような赤塗の透彫りのある耳栓が出土している。一遺跡ではあるが、その出土品目は、黒曜石、木炭、灰、礫器、打製石斧、定角式磨製石斧、石鏃、砥石を兼ねる大石皿、槌石等一一種目に達し、後期の各遺跡の総品目数には達しないが、文化発展の跡の歴然たるものがある。

一般に言つて、例えば新羽遺跡の如く、早期から、後期、或は晩期に到る迄の各遺物が同一地点、同一遺跡から現われると言うことも、特にこの地域に於て注目すべき特徴の一つである。と言うのは狭い谷に、大きな谷と、急な山崖があつて人びとが定住すべき位置が非常に制約された結果であると考えねでなるまい。この点、どこにでも住むことのできた関東地方の低地住居と非常に趣を異にしている。

縄文土器以後、弥生式との過渡期の土器は発見されていない。それだけでなく、農耕の開始によつて、立地的要件が変化するためか、これ迄の調査では弥生式、土師等の遺跡は余り発見されていない。然し真下遺跡の一部と、対岸の梁場、新羽遺跡の一部には古墳もあつて、この流域に古墳時代の聚落も、確かに存したことが立証し得られる。十石峠は、有史以後に於ても、関東平野と信州をつなぐ、一つの重要な連絡路なのである。

全遺跡を通じて、関東平野の諸遺跡より、この地域のものは絶対に石器の出土量が多く、又石屑の量も多い。然しその他一言にして言えば、その全体を通じて、ここの文化の諸相は、なお全く関東的で、信州的でないことを繰り返して述べて置こう。

B　石器時代以外の諸遺蹟

一　鬼石町バス車庫裏の古墳

鬼石町のバスの車庫の裏にある。二基あつて東の方のものは石槨が露出しており、上に大きなクヌギがある。円筒埴輪の破片も散布している。

二　鬼石町三杉町原古墳（第二九図参照）

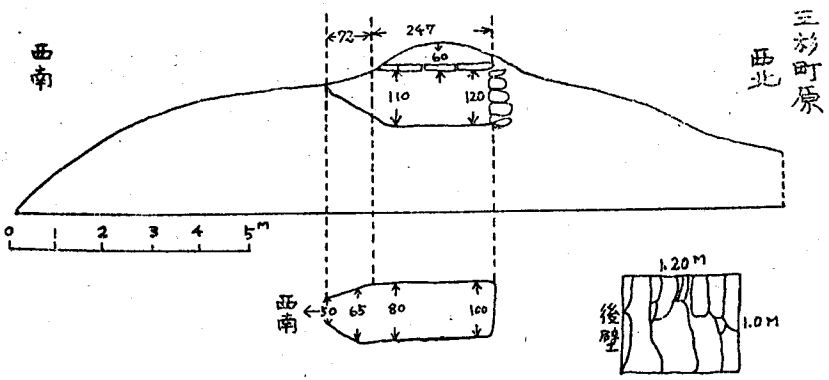
三波川と神流川との合流地点の二〇〇米程手前にある。円墳で石槨が現存している。単甲一、直刀一、埴輪土偶、埴輪五、祝部土器、土師壺等が出土した。これらの資料は大正年間の鬼石の大火の際に焼失した。

三　鬼石町三杉町大樫（俗称）古墳

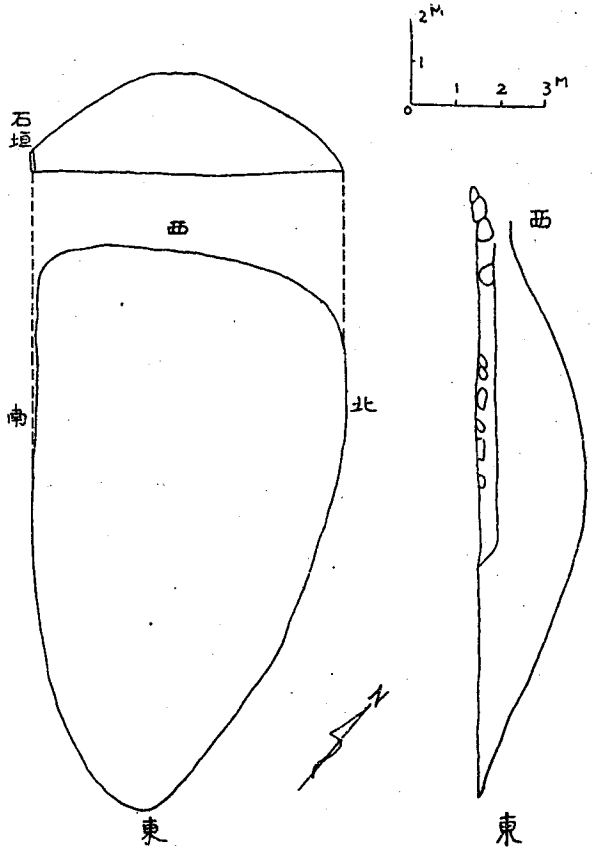
上記の古墳の北方に接してある。円墳で、未発掘、墳上に稲荷祠がある。

四　美原村譲原字真下（ました）古墳（第三〇図参照）

鬼石町附近は尙児玉郡の古墳地帯の続きで、古墳に富んでいるが、神流川の流域に入ると、古墳は非常にすくなくなる。真下古墳は真下石器時代遺跡の中央にある。火之雨塚とか、ラッキョ塚とか、ヒョウタン塚と言うような別名がある。一〇〇年乃至一五〇年程前に発掘したとも言うが、発掘した跡



第 29 図　三杉町西北古墳略測図（桜沢原図）



第 30 図　火之雨塚見取図（桜沢原図）

掘されたとも見えぬ。

五　美原村坂原上製鉄遺跡？

坂原石器時代遺跡の直ぐ上に金山神社なる社があり、その附近にタタラ場と言うのがあつて、鉄滓を出土する。附近に昇り窯式の製鉄阯が存したものと考えられる。詳細は不明。土器は伴出していないようである。

六　埼玉県（武蔵国）秩父郡上吉田村大字太田部字梁場（俗称塚山）古墳

相見石器時代遺跡の西方にある。一つの平に数基の円墳が存する由である。

七　向尾遺跡

これは新羽石器時代遺跡の対岸にあつたものだと言う。炮烙のごとき焼物が、重つて存し、窯阯もあつたと言う。然し出水の為に全部流され、現在ではその痕跡も認められぬ。余り古いものではなかろう。

八　槍峠古墳

小円墳数基、実査したが余り明瞭でない。

九　檜峠土城

勝山の聚落の上に半島状に突出した丘陵があり、その鞍部に上記の古墳群があり、それから先に土城としての工作が見られる。これもそれ程古いものではなかろう。

一〇　生犬穴洞窟

これは遺跡か否か不明である。これは石灰洞窟で、奥は一五〇〇米迄這入り得ると言う。発見されてから三〇年位のものだそうである。入口に広い部分があつて、小さい通路を通りぬけ、跳り場に出て、梯子によつて二米ばかり下がつたところに、獣骨を包含する場所があつたと言う。おいぬ穴と言う名は例えばオオカミの洞窟と言うようにも解せられる。入口の隘路を越して、如何なる獣類が、そこにもぐり込んでいたか不明であるが、シカ、イノシシの如きものが自然には通過し得ないような狭い門である。この獣骨は未だ実査していないが、将来是非試み度いものである。この外に陸地測量部の五万分図に記載されているものは、不二穴石灰洞窟である。実査しなかつたが、非常に入り難い穴だと言うことである。この穴の一部に深さ数十米に及ぶ直下孔があり、その下に転落動物骨骼の堆積があると言われている。

一一　上野村大字乙母字峠城古墳

前方後円墳。直径約七〇米、高さ約四・五米。未実査。

一二　同村大字乙母字峠古墳

円墳。径約一二米。高さ約五米。未実査。

C　飯島、桜沢両氏による神流川流域内外の石器時代遺跡地名表

1　群馬県（上野国）鬼石神社附近　　石球

2　同　県（同　国）下三波川村小学校附近　　無頭石棒（長さ六四糎、中央の太さ七糎）

3	埼玉県	(武蔵国)	児玉郡青柳村大字新宿字寄島	土器
4	同	県	(同 国) 同 郡金屋村大字塩谷	鞠生式土器、石器
5	同	県	(同 国) 同 郡金屋村大字宮内字御室谷	土器、石鏃、打石斧
6	同	県	(同 国) 同 郡金谷村大字長者屋敷	土器、石斧、槌石
7	同	県	(同 国) 同 郡秋平村大字秋山字上組	土器、石鏃、石斧、石棒、槌石
8	同	県	(同 国) 同 郡秋平村大字秋山字東	土器、石斧、石匕、槌石
9	同	県	(同 国) 同 郡秋平村大字秋山 (字不明)	土器、石鏃、石斧、石皿
10	同	県	(同 国) 同 郡秋平村大字秋山、十二元山西麓	打石斧、石棒
11	同	県	(同 国) 同 郡大沢村大字猪俣字小栗	石鏃、打石斧
12	同	県	(同 国) 同 郡大沢村大字白石字上ノ台	土器、石鏃、打石斧、槌石、石錐、石匕
13	同	県	(同 国) 同 郡大沢村大字白石字小原	土器、磨石斧、打石斧、槌石、石棒、石皿、石匕
14	同	県	(同 国) 同 郡青柳村大字上阿久原	磨石斧、槌石、石棒、石鏃
15	同	県	(同 国) 同 郡大沢村円良田字後坂	土器、石鏃屑、打石斧、凹石
16	同	県	(同 国) 同 郡青柳村大字渡瀬	石棒
17	同	県	(同 国) 同 郡東児玉村大字沼上	住居阯
18※	同	県	(同 国) 同 郡松久村大字甘粕字亀甲山	土師、祝部、窯阯
19+	群馬県		(上野国) 大里郡寄居町大字末野	窯阯数個
20+	同	県	(同 国) 多野郡美久里村大字本郷	窯阯三個
21※+	埼玉県		(武蔵国) 児玉郡松久村大字中里字天神河原	祝部土器、窯阯

石器時代地名表にあるものは省略する。※印遺物追加、+印児玉郡誌による。

余　録

以下記すところのものは巡検中飯島勘一氏をはじめ、その他の諸氏から聞知したこの地方に関する雑記である。石器時代の考察に直接関係のないものもあるが、多くはこの地方の人びとの長年の経験にもとずく生活技術に関するものなので、その意味で石器時代の生活にも一脈関連なきものとも言い得ない。

a　アユに関するもの　鮎は岩に附着した黒い水苔を食う。瀬の上の阻道を歩いていると鮎の食つたこけのあとが、透きとほる水の中に白く光つて見える。こう言うところに鮎がいるのである。その上こけについた平行線で鮎の口の大きさ、従つて鮎自体の大きさが解る。又鮎は清水を好むので、俄雨などで瀬がにごつて来ると、鮎は濁水と清水の境にいる。投網をうつには、そうしたところをねらつてうてばよい。鮎をとることを鮎ひきとも言う。これは流し釣りとも言うやり方でとることである。のぞきと称するガラス箱をのぞきながら、流れに従つて流れ、その間右手に用意してさし出している釣干を、鮎を見た瞬間に手前え引くのである。そしてこれにひつかけるのである。この方法は熟練を要するものであるが、最も多く行われている。次にあんまさしと言つて、棒の先に銛をつけたもので、やたらに石の間をつついて下流へくだる。これは鮎のみをねらうものではないが、時どき鮎もかかると言う。銛の先が磨滅するので砥石をもつていて、絶えずこれでとぐ。この外普通のつりと瀬干しがある。瀬干は余り徹底的にとるので、不道徳だと考えられているようだ。この地域には発電所の水取口の附近に魚梯もあり、鮎は毎年多量に放流されている。夕方から一時間程釣にゆくと、小形のものではあるが、二、三匹は必ずかかる。子供達は夏休み中泳ぎながら一日鮎をとる。これらがこの地方の人びとの夕食の膳を賑わす。但し千葉県の小櫃川の流域でやるように、鮎を干しておいて正月に食うと言うようなことはしない。その時とつて、その時食つてしまうと言う仕方である。

b　ヤマベ、カジカに関するもの　ヤマベは淵の暗い岩にすりついて、人のいる間出て来ない。ヤマベ漁はこのため仲なか困難である。ヤマベは串刺しにして、炉に立ててやいて食う。カジカは三角形のあみでとる。この時足でもんで、

底の石の間から魚をおいだすので、カジカもみと言う言葉がつかわれている。

c　主食について　この地方の主食は数年前迄は主として玉蜀黍の粉であつた。すこし山の奥の方へ行くと、振り米の話などがある程であつた。然し主食が配給されるようになつてから皆が白米を食うようになり、又田圃も非常に増えた。普通の畑を掘り下げて田圃にするので、保美濃山や、坂原の如き遺跡も発見された。玉蜀黍の粉は、熱湯でなるべく軟らかくとき、これを炮烙で焼く。焼く時は手でうすくのばして焼き、焼いてから熱灰の中へ突つ込む。しばらくしてそれを取り出し、中に葱味噌や、ゴマ、あん、或は塩びきの鮭、鰯など、何でもくるんで食う。バタを塗つても仲なかうまい。又この粉を、水からゴトゴト煮て、かゆにして食うこともある。この外葛の根の粉、蕨根の粉、橡餅(どんぐり)なども食う。橡の実はあくが強いので、これをいかに上手に抜くかと言うところに主婦の腕がある。白米を食うとは言え、近頃も多くの家では大麦又は小麦ばかりを煮たものを、平気で食つている。全体として米がすくないからである。ちなみに気候のせいか、薩摩芋の保存は極めてよく、翌年の夏迄大がいもつていると言う。

d　果実　この辺はいわゆるクリ帯に属しているので、クリ、クルミ、トチが多量にとれる。クリ―特に作つているもの以外はとり放題であるが、大きいのはない。クルミ―オニグルミが普通である。どこの山へ入つてとつてもかまわない。秋一年分のをとつておく。焼いて石の上でポンとたたくと容易にわれる。トチ―トチ餅にして食うこと上記のごとくである。タモウ―糊にし、餅にもなる。夏白い小さい花が咲く。ヤマナシ―秋相当に大きくなる。口の中に滓が残るのが欠点である。ヤマモモ―これは普通のモモより、小さいのが欠点で、堅く、余りうまくないが、数は非常になる。秋熟するのである。アケビ―一番甘い。ヤマブドウ。シイ―余り多くない。シイは本来すこし暖帯に属するものだからである。然し全然ないことはない。ドングリ。コガキ―これは晩秋、霜が降るようになつてから食う。小さく、黒く、甘い。グミ。ヤマイチゴ。イチヂク。リンゴ―最近つくりはじめたばかりである。キノコの類。イワダケ―これはロックライミングをして、生命がけで採集する。非常に高価なものである。油でいためてたべる。黒い海苔のようなもの

である。

e　動物

クマ、シカ、イノシシ、サル、ウサギ、テン、リス、ムササビ。クマの被害が時々ある。それは冬里附近にあらわれるのであるが、秋でも芋を食いに時々あらわれる。猟師は一日でも、二日でも追いかけて、クマを射止めると言われている。この外珍らしいのはサンショウウオがいる。小さいのはトカゲ位のものであるが、生で食うと非常に美味だそうである。子供達は岩を起してみて、これがいると直ぐ食う。ウグイス、メジロは沢山いる。山の人が天高く飛翔しているタカとトビとを容易に区別するので、不思ぎだと思つたら、尾翼の扇状のがタカ、直線を為しているのがトビだそうだ。魚のことは既にのべた。その他啼くカジカ、ヘビではマムシもいると言う。

f　十石犬

シバイヌの一種で、この地域独特のものがいる。小型のもので、ストップは強く、狆の如き顔だちで、口の先は黒く、耳はとがつて立ち、頸には蠶の如きものがあり、前肢は幾分Oバイン、毛なみは赤い方がよく、尾は左まきのものが嬉ばれている。純粋のものは弱く、速にほろびつつある。雑種化して行くのであると言う。このイヌは石器時代のイヌの特徴を残している点で興味があるが、長谷部言人博士の教示によれば、この程度の小型純日本犬と称するものは、相当各地にあるよしである。なおネコが死ぬと埋めてその上に土曼頭を作り、その頂上にシャモジを立てて置く風習がある。

g　山中美人

上野村の殊に婦人はどの人を見ても殆んど同じような顔だちである。目に非常に特徴があつて、モンゴリヤンフェルテが多く見られる。一言にして言えばおかめのような顔である。この型の女を特に山中美人と呼んでいる。

g　方言

「何々じや」と言う言葉が多く用いられる。「そうじやむし」と言うのは上野村独特の言葉らしい。「山中のむし言

葉」と呼ばれている。信州のずらはすこしも入つていない。行くは「いぐ」。入るは「ひやる」。名詞の方言も多いようだ。

i　農具

えんぐわ―柄鍬のことであろう。柄の付き方が彌生式の農具と同じである。さくきり。にほんまんの（二本万能）。やなーしよいことも言う。背負う肥桶である。

j　生業

主な生業は山林の木の伐り出しと、炭焼と、農業である。殊に蒟蒻をよくつくる。これは三年に一度位収獲する。その他おかぼ、いねをつくるが、量はすくない。自給自足には勿論足りない。粟、そば、ひえ。ひえは余り作らない。馬鈴薯はよくできる。さつま芋もつくる。特別な仕事としては楮（コウゾ、方言カゾ）で紙をつくる。これは主に冬から初春へかけての仕事である。どこの家にもカゾを煮る大きな釜がある。その外紙を作る一切の道具が揃つている。上野村には漆をとつている林もあつた。ヒツジ、ヤギ、メンヨウ、ブタはすくない。ウサギ飼育、養鶏は盛んでない。焼畑もやつている。第一年目に木を伐り、第二年目に根を掘つて焼畑とし、第三年目で漸くいい畑になる。これは飛弾の国の場合と同じである。

k　住居

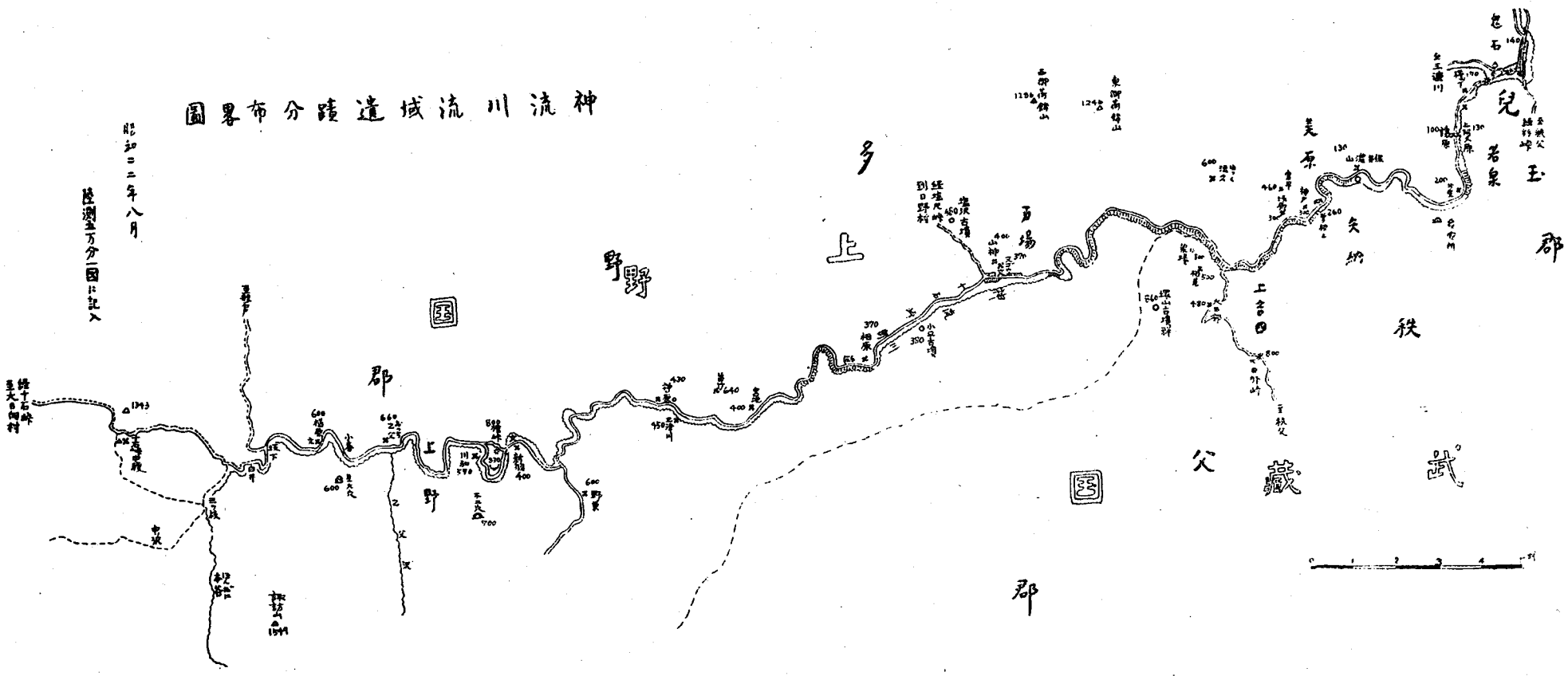
住居は総て二階になつている。二階は養蚕で、普通使うのは下だけである。入口は土間で、その突き当りが勝手。ここに大きな炉がきつてある（炉の奥に寄つた方が主人の席、木尻と言つて、これが末席である。薪のしりがその方に向く）。土間の隣が座敷で、飛弾の家のおえに当るところである。上等の家だとここに玄関がつき、玄関に小さい書院がつく。子供の勉強間などになつている。座敷の奥が納戸、納戸の両隅に仏檀と戸棚がある。納戸には普通老夫婦が寝る。飛弾の民家の仏間に当るものはない。座敷の次の間は飛弾と同じくでえと呼ばれている。でえの奥はおくり又は上でえとよ

ばれ、その突き当りに床とちがい棚とがある。座敷、でえ、おくりの外側に縁がある。その表に面したものが普通の縁で、でえの方のは外縁、場合によつてはでえと納戸の裏迄縁のあることがある。主人は普通おくりで寝る。客はでえに泊る。座敷は客間である。土間と勝手の外側にある何個かの部屋は本来は馬屋と物置とになつていたらしいが、ここに大概どこの家にもカゾをふかす大きな竈があり、又大概臼などが置いてある。どの家も柿葺で、奥地に行く程大きな石が規則正しくその上に並べてある。柿葺の板は自家製で屋根は大概自分でふく。家を作る時なども大工は一人二人頼む丈で、あとは自ら共同して作る。屋根の棟の両角に千木と同じ意味と考えられる一つの交錯した突棒が出ており、ここに家紋や、水と言う字がかかれてある。

1　伝説

この地域独特の伝説としては将門に関するものがあつて、神流川の美原村の向いあたりに桔梗ノ前が自殺したところで、桔梗が一つも咲かぬところがあると言われている。その他地名に高天ケ原山とか、岩戸山とか言うのがあつて、それに関連して、一般に何か考えられているようである。例の鏑川の多胡の碑が近いので、やはり羊太夫に関する物語も、この地方の人びとの話題になつている。そのほか特殊な物語は余り聞かなかつた。

以上

神流川流域遺蹟分布略圖

昭和二年八月
陸測五万分一図に記入